

カルマ・チャクメーの極楽願文

『清浄大楽国土の誓願』の和訳と研究

—往生の第四因、廻向の段後半と流通分—

藤仲孝司、中御門敬教

はじめに

私たちはここ数年協力して、カルマ・チャクメー（1612-1678）の『清浄大楽国土の誓願』（略称『大楽誓願』）を翻訳研究し、『佛教大学総合研究所紀要』（vols.18,19,20）に合計6回、発表している（vol.20は2013年春公刊の予定）。これは『浄土教典籍目録』（同研究所編、2011年）において私たちが調査し解題した、チベットの浄土教関係の典籍約200タイトル的一部分である。

チャクメーはカギユ派・ニンマ派の学者・行者であり、いわゆる「無宗派運動／リメー（Tib.Ris med）」の創始者の一人である。この極楽願文はチベットでツォンカパ著『極楽願文・最上国開門』とともに最も広く普及した二大極楽願文の一つであり、埋蔵経「虚空法（天空法）」の中心典籍である。

『大楽誓願』は、註釈者によれば、極楽往生の四因の説示をその基本構造としている—この四因はツォンカパ著『最上国開門』に倣ったものと思われるが、それは『無量寿経』が典拠である。『大楽誓願』のうち、序分、正宗分のうち、第一の因、無量光仏と観自在、大勢至の両菩薩と極楽浄土の形相をたびたび作意する部分、第二の因、福德の資糧を積むことが七支供養として提示されている部分（本願文の最も特徴的な部分）、第三の因、正覚へ発心する部分（願文自体に文言は無い）と、第四の因、善根を自他が極楽に生まれる因として廻向する部分までは、すでに発表した。本稿はそれに続く最後の個所であり、往生の第四の因の途中から、流通分までである。

内容は、極楽往生を中心として仏道の完成を祈願するものである。そこには無量光仏の入滅、観自在、大勢至による継承も言及されているが、これは『悲華経』に

よるものである。訳註に多く参照した『弁別釈』と『疏』についてはすでに紹介したが、前者は東北大学の目録（No.7019）にチャクメーの自註とされるが、チャクメーからの伝聞の記述、奥書の記述からも19世紀のトゥクジェ・シャンパン・ペルサンの著作である。『疏』はラクラ・ソナムチュードゥプ（1862-1944）の著作である。

翻訳研究の方針や記述方法については、『佛教大学総合研究所紀要』（vols.18,19,20）の拙訳を参照していただきたい。そこで述べたように、この願文やその註釈文献は文言が簡略または晦渋の箇所も少なくないが、できる限り逐語訳に努めると同時に、理解しやすいように註において補足説明するようにした。

本文和訳

〔未来の〕マイトレヤ（Byams pa.弥勒）に始まってアディムクティ（Mos pa.勝解）までこの賢劫の〔千の〕諸仏⁽⁴⁾が、この世間にいつか出現なさるとき、神変の力によりここに（東洋 9a）来たってから、〔彼ら〕仏を供養し、正法を聞き、再び大樂の国土に障碍なく往きますように！

⁽²⁾八十一の十万のコーティ・ナユタ（千万億）の仏の仏国土すべての（PS18b）あらゆる功德の莊嚴を一つにまとめたもの〔である〕すべての国土より特に勝れた無上の（宗 661）かの極樂国土（Toh.11b）に生まれますように！

⁽³⁾宝の大地は平坦であり、掌のよう。広く大きく明るく光輝く。〔足で〕踏むと下がるし、〔足を〕上げると上がる。安樂で穏やかなかの国土に生まれますように！

⁽⁴⁾多くの宝から成就した（PS19a）如意樹 — 〔その〕葉は良い絹、果実は宝の莊嚴、その上に、^{へんげ}變化の鳥の〔様々な〕群は妙なる歌声により、甚深と広大な法の声を轟かせる〔という〕（東洋 9b）大いなる驚異のその国土に生まれますように！

⁽⁵⁾香水の河は（祝 228）八支分の功德⁽⁶⁾を具えていて多い。同じく甘露の沐浴の〔諸々の〕池は、七種の宝の階段、煉瓦により囲まれている。蓮華は香り、果実を（PS19b）つけている⁽⁷⁾。蓮華の無量の光明を（Toh.12a）放つ。〔各々の〕光の先には変化された仏が莊嚴する。（宗 662）大いなる驚異のその国土に生まれますように！

⁽⁸⁾八難⁽⁹⁾と悪趣という言葉は知られていない。煩惱の五毒、三毒、病と魔、敵と貧乏、困窮、闘争など苦しみすべては、その国土において聞こえる経験をしな。かの大樂の国土に生まれますように！

⁽¹⁰⁾女は（PS20a）いないし⁽¹¹⁾、胎生は無い。どんな者も蓮華の蕊から誕生なさつ

た⁽¹²⁾。すべてのお身体は差別が無く金の色⁽¹³⁾。頭における頂髻などの相好により荘厳されている⁽¹⁴⁾。(東洋 10a) 五神通⁽¹⁵⁾と五眼⁽¹⁶⁾がすべての者にある⁽¹⁷⁾。功德が (Toh.12b) 無量であるその国土に生まれますように！

⁽¹⁸⁾自然^{じねん}の種々の宝の無量宮〔すなわち〕何でも欲しい資財は、意に念じたことにより生ずる。(PS20b) 努力は必要なく、必要な欲しいものは自然に成就している。私とあなた〔という差別〕が無いし我執が無い⁽¹⁹⁾。(宗 663) 何でも欲しい供養〔の品の〕雲が掌から生起する⁽²⁰⁾。すべての者が無上の大乘の法を受用する⁽²¹⁾、〔というそれら〕安楽・幸福すべてが生起するその国土に生まれますように！

⁽²²⁾芳しい香りの風により、花の大雨が(祝 229) 降る。木と河と蓮華のすべてから、快い色、声、香、味、触の受用〔されるべき資財による〕供養の雲の (PS21a) 蘊(あつまり)が常に生ずる。⁽²³⁾女はいないが、変化の天女の衆、多くの供養妃が常に供養する。坐りたいと欲するとき、(Toh.13a) 宝の無量宮〔が生じ〕(東洋 10b)、寝たいと欲するとき、宝の好い座の上、多くの絹布⁽²⁴⁾の臥具、座具および枕〔が生ずる〕。

⁽²⁵⁾鳥と樹、河の音楽など、聞きたいと欲するとき、妙なる法音を響かせる。欲しないときには、耳に (PS21b) 音は響かない。甘露の池、河それらもまた、(宗 664) 暖かさ、冷たさ、何でも欲することが、彼にとってそのとおりに生起する。意^{こころ}のままに成就するその国土に、生まれますように！

⁽²⁶⁾その国土には正等覚者無量光〔仏〕が、無数劫に涅槃しないで住しておられるー そのかぎり、彼の侍者になれますように！ (※)

⁽²⁷⁾いつか、かの無量光〔仏〕が寂靜に逝かれた〔とき、〕ガンジス河の砂ほどの二つ (Toh.13b) の〔無数の〕劫の間、〔その正法である〕教えが (PS22a) 住する〔が、その〕とき、摂政〔である〕觀自在〔菩薩〕と離れないで、その期間に正法を受持しますように！ (※)

⁽²⁸⁾夕べに正法が没した〔とき、次の〕暁に、かの觀自在〔菩薩〕⁽²⁹⁾が (東洋 11a) 現等覚してから⁽³⁰⁾、「光明普勝吉祥積王 (’Od zer kun nas ’phags pa yi dpal brtsegs rgyal po)」⁽³¹⁾ (祝 230) と名づけられた仏陀となったとき、お顔を見て⁽³²⁾供養し、正法を聞きますように！ (PS22b)

⁽³³⁾寿命が九十六のコーティ (千万) のナユタ (千億) 劫に (宗 665) 住しておられるとき、常に侍奉、親近するし、不忘失の陀羅尼 (総持) により正法を受持しますように！ (※)

⁽³⁴⁾〔その如来がやがて〕涅槃してから、その教えは六億三十万のコーティ (千万) の劫、(Toh.14a) 住する。そのとき、法を受持し、大勢至〔菩薩〕⁽³⁵⁾と常に離れま

せんように！

(36)次に、その大勢至〔菩薩〕が(PS23a)〔現等覺して〕仏となって、善住珍宝功德積王如来⁽³⁷⁾となり、寿命と教えは觀自在と等しい。常にかの仏の(東洋 11b)侍者をし、供養により供養し、正法すべてを受持しますように！

(38)次に、私のその寿命を換えた〔すなわち生まれ変わった〕直後に、その国土または他の浄土において、無上の(PS23b)正等覺を得ますように！

(39)正等覺してから〔善逝〕無量寿のように(宗 666)お名前がただ聞こえたほどにより、〔世の〕衆生すべてを成熟し解脱し、無数の(Toh.14b)変化が〔世の〕衆生を導くことなど、努力なく自然成就に、衆生利益が無量でありますように！⁽⁴⁰⁾

(41)如来の寿命と福德と功德、智慧、威光は無量である。⁽⁴²⁾法身(祝 231)無辺光(sNang ba mtha' yas)、無量光('Od dpag med)、(PS24a)無量寿智(Tshe dang ye shes dpag med)⁽⁴³⁾〔である〕世尊よ、およそあなたのお名前を受持する者は、かつての業の異熟を除いて、火、水、毒、武器、ヤクシャ、羅刹などの恐れすべてから救護することを、牟尼は説かれました⁽⁴⁴⁾。私は、(東洋 12a)あなたのお名前を受持し、礼拝するので、恐れと苦しみのすべてから救護なさるよう御願いします⁽⁴⁵⁾。吉祥が(PS24b)円満であるよう加持してください。

(46)仏〔すなわち〕三身(Toh.15a)を獲得した者の加持と、変わらない法性〔すなわち〕諦の加持⁽⁴⁷⁾と、(宗 667)分裂しない和合僧の加持により、誓願を立てたとおり、成就しますように！

(48)三宝に帰命します。⁽⁴⁹⁾tadya thā / panca indriya avabodha ni swā hā /—〔これは〕誓願が成就する陀羅尼です。⁽⁵⁰⁾

〔すなわち、〕三宝に(PS25a)帰命します。⁽⁵¹⁾「na mo manydzu shri ye / na mah su shri ye / na ma uttama shri ye swā hā /」⁽⁵²⁾と述べてから三〔回〕礼拝するなら、十万になると、説かれました。

〔追記〕

(53)次に、勝れた者は百回、中〔ほど〕の者はできるだけ、最低〔の者〕でも七回以上、礼拝します。この勝れた者は無貪であり、中〔ほど〕の者は(Toh.15b)〔一定の〕年と月ほど、無貪です。最低の者は何らかの場合に顔を西に向けて、極楽の国土を意に憶念し、無量光〔仏〕に合掌して、ひたむきな〔心を一境に專注した〕信仰により唱えたなら、(PS25b)今世での寿命の障碍は除かれ、(祝 232)後で極楽に生まれることは疑いがない。

〔以上は、〕『無量寿経 ('Od mdo)』、『阿弥陀経 (Zhing bkod mdo)』と、『悲華経

(*Padma dkar po*)』、『無死鼓音声王陀羅尼 (*'Chi med rnga sgra*)』などの意趣です。

(54)

と〔以上を〕比丘ラーガースヤ (*Rāga a sya*) が著作した〔。その〕ことにより、多くの有情たちが極楽に生まれる因になりますように！⁽⁵⁵⁾

訳 註

(1) *'Phags pa sNying rje chen pa'i pad ma dkar po zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*; D mDo-sde No.111 Cha 91b5; P No.779 Cu 105a3; 大正 12 No.380 『大悲經』 p.958a (ただしアディムクティの箇所は「廬遮」と翻訳されている)に、釈尊がアーナンダに対して、沙門を自称する者、沙門まがいの者をも含めて全ての者が、彼ら賢劫の諸仏のもとで次第に無余依涅槃するであろうという趣旨で「マイトレーヤからアディムクティに至るまで」と言及されている。『弁別釈』、『大楽国土誓願の註疏』には説明がない。チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」では、マイトレーヤの兜率天への往生と関連して、賢劫の千仏の出現と彼らと出会い、法を聴聞することが説明されている。Cf. 和訳 藤仲孝司「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」(『佛教大学総合研究所紀要別冊 浄土教典籍の研究』2006) pp.69-70

また、『大楽国土誓願の註疏』 pp.284-287 には、誓願と善悪の業果、極楽往生について詳論されている。一般的な議論の部分を抜粋して和訳しておく —

「そのように因〔である〕資糧の集積に依って、縁〔である〕誓願を立てること—これに今から努めることが必要です。明日死んだときに或る上師に期待を、その上師も無量光〔仏〕に期待を持っている。〔来世を〕極楽に投ずることができるのは、因より他の方便は無いが、そのとききわめて難しいのです。」

「一般的に劫の良し・悪しより誓願の成就・不成就が説明されているが、誓願を成就させる因は、福德の資糧を積んだことを待った(依った)ものなので、福德ある人は欲する目的を願ったすべてが成就するのです。「福德を持った人は思いが成就する」(※1)と説かれています。特に極楽に生まれる誓願を立てるこれは、自己の信解・願樂と、無量光〔仏〕がかつて多くの誓願を立てたことを今現証なされたことの両者を結合させるなら、きわめて成就しやすいのです。」

ここで臨終時の誤った誓願により夜叉や悪王や魔物といった悪しき生を受けたインド、チベットの因縁譚を幾つか出してから、次のようにいう —

「そのようなことはきわめて多いので、幾らか善が成就するのも善い誓願を立てたことにより正しく廻向することが必要ですが、誤って廻向すべきではない。よって、この極楽願

文は、因を修証しやすくして最高の果が成就する希有な近道なので、今の人たちもこの〔極樂往生の〕四因ほどを修証できるし、それを修証したなら、誰も極樂に生まれることに困難は無い。そこに生まれてからは、〔その業果が〕どのように好ましくても、〔因である〕業の力により〔その果として〕悪趣に戻る必要などはありません。仏の強烈な誓願があるし、最終的に仏〔の地〕を得るより他に退かない。よって、これについて思弁なさらないようお願いします。

他者に従う疑いを持つ者と〔他者に〕信仰を持つ者の衆は〔極樂往生とそれによる菩提行より〕外れる怖れが大きい。概して受用身の諸国土には、〔菩薩地の大〕地を得た者〔を除いてそれ〕以下は生まれません。変化身の国土についてもまた、五濁が盛んであり、あまりに器〔世間〕・有情〔世間〕が衰退の激しい国土のようものには、生まれやすいが、業の地を持ったものであるから、損なわれやすい。変化身の或る浄土には、大菩薩のみが満ちているなど、器〔世間〕・有情〔世間〕があまりに円満すぎるので、〔菩薩地の大〕地を得たような者以外は生まれることが難しい。極樂には、四因を修証した資糧の集積と無量光の誓願だけの力より生まれることが易しいことを、説かれた。およそ信解がある者は成就しやすいので、こ〔のチベット〕の人たちは極樂への信解が大きく、たとえ在家者たちのお祈りにおいても、「あなたは極樂に生まれよ」と互いに善き縁起を述べたのです。それもまた仏の威力です。『入行論』[15]に「あたかも夜の暗闇の黒雲に、雷電の走る刹那、照明するように、同じく仏陀の威徳により、百回に〔一つ〕世間は福德の知恵が一瞬、生起する。」という。

よって、〔オーム・〕 マニ〔・ペーメ・フーム〕(※2)の言葉一つを唱える善もまた、自他すべてが極樂に生まれるように！と誓願と一緒にして為すべきです。〔例えば、〕『普賢行願讃』(※3)にもまた信解行から仏陀までの実践は初業者よりも誓願に為して、異生(凡夫)の依処〔の身〕において極樂に生まれる因を修証して、そこに生まれてから誓願すべてを現証するよう誓願なされたように。」

※1) Pha bong kha po bDe chen snying po 著『道の根本〔である〕善知識に親近する作法 (Lam gyi rtsa ba bshes gnyen bsten tshul)』6a4 (ACIP ed.No.S0323) に mDo rgya cher rol pa (D No.95 Kha; 大正 3 No.187) の教証として引用されている。

※2) チベット仏教圏で盛んに唱えられている観自在菩薩の六字真言 Om maṇi padme hūṃ のことである。

※3) 『行願讃』自体に信解行地から仏地といった階梯に関する直接的言及は無い。シャークヤミトラの註釈にはそれへの言及が見られる。Cf.中御門敬教「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究(1)」(2003) p.35; また、「極樂に生まれてから誓願すべてを現証するよう誓願なされた」ことについては、『行願讃』v.58 を参照。Cf.中御

門敬教「往生後論攷」(2004) p.38; なお、普賢行の先行經典であり、『行願讚』v.58の典拠と考えられる『文殊師利仏土嚴淨經』(P Wi 304a; D Wi 268a)には、1) 生前に希望の仏国土に生まれるよう誓願する、2) 往生後に自己の将来の理想的な仏国土を設定する、3) 仏から教示を受ける、4) 仏と同じく修行(誓願行)する、という内容や目的が説かれる。

(2) 『弁別積』(66b5-67a4)に次のようにいう -

「第二: 国土の莊嚴を中心として誓願する

(※1) 八十一の十万のコーティ・ナユタ(千万億)の仏の仏国土(67a)すべての功德の莊嚴すべてを一つにまとめたもの〔であり、〕他の国土すべてより殊更に勝れた無上の功德のかの極樂国土(※2)に、生まれまますように! (※3)かの国土の莊嚴は、一分ほど以外は一つの蓮華の功德から始まって〔それらを〕正等覚者が劫にわたって述べても尽きない広大なさま(※4)を、『經』に説かれている。」

※1) 国土の数について、『無量壽經』の梵本とチベット訳(Cf.『淨全』23,p.235)はこの所説と一致するが、魏訳では「二百一十億諸仏刹土」と出ている。

※2) 『大樂国土誓願の註疏』p.288(下線部は願文本文)は、次のように『無量壽經』(Cf.『淨全』23,p.234)の所説より補足している -

「かつて世自在王仏が法蔵比丘に対して(中略)一コーティ年に説かれたのを、その〔法蔵〕比丘も^{こころ}意に受持し、五劫に思惟して、それらを一つにまとめた。他のすべての国土よりも円満であり特に勝れた無上のものを撰取して誓願を立てた。それから多くの劫に資糧を集積したし、それを全く浄化して今、現証なされたかの極樂国土」

以下、『無量壽經』の極樂淨土の莊嚴を述べた個所をまとめた内容となっている。

『大樂国土誓願の註疏』p.288には、まず「清浄な器〔世間のうち、〕大地の功德」という項目を立てている。

※3) 『大樂国土誓願の註疏』p.288には、ここから「概説」という項目を立てており、以下は個別の説明ということになる。

※4) Cf.『淨全』23,pp.266,280,286; 『大樂国土誓願の註疏』p.289に、「ここには悦びが生じ、資糧を積むために、わずかほどを述べたのです。」という。

なお、『撰大乘論世親釈』第10章「果の智」の法身の自在を説く箇所には、五蘊各々の転依により自在が得られることが説かれている。すなわち、色蘊の転依により国土、仏身、相好、音声の自在が獲得される-これにより金銀などの宝の淨妙な国土を現し、欲するとおりの身体を示し、大集会の中で有情の信解するような色身、相好を現し、無辺の音声、無見頂相を現す。受蘊の転依により、無罪で廣大無量の樂住の自在が獲得される。想蘊の転依により、

名（単語）の聚、句（文章）の聚、文（字音）の聚を弁説する自在が獲得される。行蘊の転依により化作、転変、有情の摂取と善の摂取の自在が獲得される。識蘊の転依により円鏡智など四智の自在を獲得する。—いわゆる「転識得智」である。Cf.長尾雅人『撰大乘論 和訳と註解 上』pp.336-340; 勝呂信静、下川邊季由校註『新国訳大蔵経 撰大乘論釈』（2007）pp.332-334

(3) 『弁別釈』（67a4-b3）に次のようにいう。—

「大地の功德を説明することは〔次のとおり—〕宝の大地は〔高低がなく〕平坦であるのは、童子の掌のよう〔である〕（※1）。どの方向に見ても辺際が顕わでなくて、大小の量を取らえきれないので、広いし、あらゆる方向が宝から出来ているし、〔仏の〕身の光明によりすべて明らかであり、光輝く（※2）。（67b）〔その地は、足で〕踏んだなら、指四本下がるし、〔足を〕挙げたなら、それほど上がる（※3）もの〔であり、そこ〕へ、谷（※4）、凹凸、窪んだへこみ（※5）の形相が無いので、安楽である。または樹木の所触などがふれたのも安楽な自性を持ったものなので、そのように名づけられています。天の衣ニヤリカ（※6）のように触れたなら柔らかい。範囲が全く広いかの国土に生まれますように！（※7）」

※1) 『無量寿経』に対応する記述がある。Cf.『浄全』23,p.274; gzhon nu（少年、童子）について、『大楽国土誓願の註疏』p.289 には gzhon nu ma（少女、童女）とある。『無量寿経』には単に「掌のように平坦である」とのみいう。この文言は漢訳諸本では、谷が無いといった翻訳になっている。

※2) 『無量寿経』には十二光仏の記述の直前に、十方のガンジス河の砂ほどの無数の国土が、無量光仏の光により常に満たされているという記述がある。Cf.『浄全』23,p.264

※3) 『無量寿経』と内容は一致するが、語彙は違ったものを用いている。Cf.『浄全』23,p.284

※4) lung 山岳と峡谷からなるチベットの地勢を考えての言葉であろう。

※5) gsha' gshong とある。gsha' は『蔵漢大辞典』に出ていない。『拉薩口語辞典』pp.983-984 には、gsha' dkar=bsha' dkar とあり、錫、洋鉄、烏口鉄などとある。ここでは直前からの対比の記述と、gzhong bu（窪地）の用例を考えて翻訳しておいた。

※6) nya (nywa?) li ka とある。『大楽国土誓願の註疏』p.289 には「絹の厚い座席のよう柔らかい」という。『無量寿経』（Cf.『浄全』23,p.284）には、「それら花の形相は柔らかい。譬えほどとしては、カチリンダ絹のように触れるなら、安楽である。」と出ている。

※7) 『大楽国土誓願の註疏』p.289 には通仏教的な色界の静慮（禅定）、無色界の等至の修習方法を再構成したような説明も見られる。すなわち —

「現在私たちがいるこの不浄な国土の器・有情〔世間〕については、粗雑な苦の自

性だと思って厭離を生ずる。極楽については寂靜・安樂の功德の自性だと思って強力な歡喜と願樂を生じさせる。これら誓願を立てることが重要です。」

法藏比丘の誓願第四十（魏訳の第三十九）には、比丘阿羅漢が、苦悩が無く第三静慮に入ったようになる（魏訳では、人天の受くるところの快樂、漏尽比丘のごとくあらずんば、という）という。この規定は、他の浄土教典にも、例えば『文殊師利仏土嚴淨經』にも見られるが、第四静慮になると、樂さえも無くなるので、「極樂」とはいえなくなることに関係するのであろう（Cf. 藤田宏達(1975) p.198）。ともあれ、阿羅漢が、苦悩が無いという場合、苦苦、壞苦だけでなく行苦も無いことになる。

Cf. 『浄全』 23,p.250

なお、極樂の莊嚴を他の仏典と比較した研究に、畝部俊英『2002年 安居次講 『阿弥陀經』 依報段試解』（東本願寺 2002）がある。

(4) 『弁別積』（67b3-68b2）に次のようにいう —

「樹木の功德（※1）もまた、各々の樹木にもまた根と幹と枝と葉と萼と花と果実の七つずつが有る。それもまた、或るものは根が金、幹が銀、枝が昆瑠璃、葉が水晶の自性。萼は珊瑚（※2）、花は赤真珠、果実は金剛石から造られたものが有る。或るものの（※3）根など七つすべてが各々の宝（68a）から造られたものが有る。同じく、二つの宝と、三つと四つと五つ、六つから造られたものなども有るので、多くの宝から成立した、意で量るほどの如意牛の如意宝樹（※4）の葉っぱの冠と耳飾りと胸飾りと腕輪と肩飾りと指輪と金の飾り帯と金と真珠の網と絹緞子の様々と多くの集まった宝（※5）でもって莊嚴されている。

その上に（※6）変化の鳥〔である〕カラビンガ（迦陵頻伽）とカッコウ（※7）とオウムと戴勝鳥（※8）とツルと赤ガモ（※9）とクジャクとホトトギス（※10）など、螺貝の色のように白い〔鳥〕、緑宝玉（トルコ石）のように青い〔鳥〕、砂・水〔の混合物〕（※11）のように赤い〔鳥、といった〕様々な〔群れの〕種類の鳥たちは（68b）、妙なる歌声により、四法印〔の声〕（※12）と甚深と広大の法の声（※13）を轟かせる〔、という〕大いなる驚異のその国土に生まれますように！」

※1) 『無量寿經』でのアーナンダへの所説に対応する内容がある。Cf. 『浄全』23,pp.270-274

※2) pug とあるが、『無量寿經』（Cf. 『浄全』 23,p.270）での記述より発音が同じ spug の異表記だと考える。

※3) 具格 gis であるが、文脈より属格 gi で読んだ。

※4) 『大楽国土誓願の註疏』 p.290 には、「その樹はまた、無量光〔仏〕の福德と、自己の福德を積んだことの自在果より、知により欲するすべてが意の如く生ずる樹」という。

- ※5) 'brus rin po che とともに 'thus rin po che とともに読める。前者の 'brus は『藏漢大辞典』に確認できない。『無量寿経』の対応箇所 (Cf. 『浄全』 23,p.282) の rgyan rin po che brgya stong du mas (多くの百千の宝の莊嚴により) を参照して、後者を採った。
- ※6) 『無量寿経』でアーナンダへの所説 (Cf. 『浄全』 23,pp.278)、『阿弥陀経』の極樂の莊嚴を説く箇所 (Cf. 『浄全』 23,pp.344-346) に関連する内容がある。『無量寿経』では「その上に」ではなく、「[池水の] 周辺に」とある。また、両経典では悪趣の名も無いとされ、これら鳥たちは、『無量寿経』では「如来により化作された鳥の群れ」と呼ばれる。鳥たちのいる池の水の声は、仏法僧、波羅蜜、地、力、三解脱門などの声として生ずる、という一ただし鳥たちの声でもそうなるかは不明瞭である。『阿弥陀経』では、鳥たちは畜生に生まれたものではなく、「無量寿如来自身が法の声が生ずるために化作したものたち」と呼ばれ、彼らの昼夜三回ずつ歌うのは、菩提分法の声であり、聞く者たちは仏法僧を思惟するとされている。『大楽国土誓願の註疏』 pp.290-291 にも、「悪趣の畜生道ではない、仏陀の化作」、「三宝の功德など様々な声を轟かせることにより、心の迷乱 (※)・分別が刹那に寂滅するので、無量の安樂を生ずるなど」と説明する。※) 'khul とあるが、文脈より 'khrul に訂正する。なお、極樂における鳥の種類については、畝部俊英『阿弥陀経』依報段試解』(2002) p.107ff. に詳しい。
- ※7) khu byug. イェシェーケの『藏英辞典』にはカッコウとされているが、『浄全』23,p.278 にはホトトギスとされている。
- ※8) zer mo. この名の鳥は『無量寿経』『阿弥陀経』の関連箇所に出ていない。『藏漢大辞典』によれば、pu pu khu shud と同じものであり、五色の羽毛を持ち、頭上にとさかを持った鳥であるという。
- ※9) ngang ngur. 『無量寿経』の ngur pa に対応するのか、あるいは、ngang pa (ガチョウ) と ngur pa (赤ガモ) の二つの略称かと思われる。
- ※10) ku la na イェシェーケの『藏英辞典』にはヒマラヤの鳥の一種とされているが、『浄全』 23,p.278 にはインドカッコウとされている。
- ※11) bye chu とある。『大楽国土誓願の註疏』 p.290 には byu ru (珊瑚) となっており、より適切かと思われる。
- ※12) chos kyi sdom bzhi はまた、bkar btags kyi phyag rgya とともにチベット語訳される。仏法の正しい見解をまとめた四つ、すなわち、諸行無常、有漏皆苦、諸法無我、涅槃寂靜である。なお声 (Tib.sgra, Skt.śabda) は単なる音声ではなく、意味を持った言葉であり、「～ということば」と翻訳したほうが分かり易い側面もある。畝部俊英『2002年 安居次講 『阿弥陀経』依報段試解』(東本願寺 2002) p.161 には、極樂

の莊嚴についてきわめて人工的であること、そこでは人間の言葉が生じて教化されることが強調されている。ただし人工的とか人間の言葉といっても、業と煩惱によるようなものではないことは言うまでもない。

※13) 甚深は空性、広大は菩薩行を形容する言葉であり、その内容は註25の中で言及する『無量寿経』の記述を踏まえたものと言える。

(5) 『弁別釈』(68b2-69a6) に次のようにいう —

「(※1) 水と花の功德もまた、香水でもって全く薫じつけた河、〔すなわち〕清涼で旨くて軽くて柔らかくて無垢であり、飲むと腹に優しく (※2)、喉をも害しない八支分を具えた水だと説明されている (※3)、というように、八支分を具えていて、(※4) 深さは十二由旬、幅は (※5) 一ヨージャナ (由旬)、十、二十、三十、四十、五十までと、百千〔ヨージャナ〕の量も有り、多い。(※6) 階 (きざはし) すべては金の砂を広げている。同じく甘露の自性 (69a) である沐浴の〔諸々の〕池もまた、七宝の階段と (※7) 煉瓦により囲まれているので、入りやすい。沐浴をしたことにより、殊勝なる等持が〔心〕相續に生まれた (※8)。その外側、周辺においては、(※9) 天の花〔である〕ウトバラ (青蓮華) と、蓮華と、睡蓮と、白蓮華など、きわめて香るものにより覆われている。それもまた果実を持っている (※10)。(※11)〔蓮華の大きさは〕一ヨージャナ (由旬) の量など有るが、蓮華の蕊〔すべて〕 (※12) から無量の光を放つし、光の先端には変化された無数の仏 (※13) が莊嚴している — 彼らは、仏が〔現在〕居られない他の国土に行かれて、(※14)〔人とそれ以外の〕天、龍、ヤクシャ、ガンダルヴァなどに対して各自の言語において法を説くので、大いなる驚異を具えたかの国土に生まれますように！ (※15)」

※1) これも『無量寿経』に対応する箇所がある。Cf. 『浄全』23,p.278; 『大楽国土誓願の註疏』p.291 にはこの項目を「水と蓮華の功德」と呼んでいる。

※2) byams (?) pa とある。『大楽国土誓願の註疏』p.291 では bde ba (安楽だ) となっている。

※3) 八功德水については次の訳註6を参照。

※4) 『無量寿経』に対応する文章がある。Cf. 『浄全』23,p.276

※5) kha zheng とあり、『大楽国土誓願の註疏』p.292 にも同様である。『無量寿経』では kha tshon と翻訳されているが、これは古い用語のようである。

※6) 『無量寿経』、『阿弥陀経』に対応する文章がある。Cf. 『浄全』23,p.278,344

※7) 『大楽国土誓願の註疏』p.292 に「赤真珠などの煉瓦」というが、内容として疑問が無いわけではない。

※8) las 'khrungs pa (より誕生なされた) とある。文脈から『大楽国土誓願の註疏』p.292 の la skye ba (に生じた) を参照した。『無量寿経』(Cf. 『浄全』23,p.278) では、入

るとき、水の深さあるいは水の涼しさ、暖かさが願いのままに適度であり、安楽であることが言われるが、三昧への言及は無い。

※9) 『無量寿経』に対応する文章があるが、そこでは周囲にあるのは華ではなく鳥たちである。Cf. 『浄全』 23,p.278

※10) 次の訳註7を参照。

※11) 『無量寿経』に対応する文章があり、半ヨーjanaから十ヨーjanaまでもあるという。Cf. 『浄全』 23,p.274

※12) 『無量寿経』では「蓮華すべてから」という。

※13) 『無量寿経』では、「金色を持った仏身、三十二の大士の相のあるものが三万六千コーティ出現する。彼らは東方に無数無量の世界に行かれて有情たちに法を説く。」などという。Cf. 『浄全』 23,p.274

※14) いわゆる「一音説法」につながる内容である。ただし、他国土の教化対象者が人以外の「八部衆」に限定される必要性はないし、『無量寿経』でもこのような文言は無い。

※15) 『大楽国土誓願の註疏』 p.292 には、「〔以上〕それが器の功德の略説である。」という。

(6) 『阿弥陀経』(Cf. 『浄全』 23,p.344 ll.3-4; チベット語訳からの翻訳)には次のように説いている -

「シャーリプトラよ、さらにまた極楽世界には、(※1) 七宝の池〔すなわち〕八功德水により満たされ、宝の蓮華により覆われていて、鳥が飲めるよう近くなっていて、金の砂が敷かれたものが、ある。それら池の四方すべてにおいて階段は麗しく、見て好ましく、金と銀と毘瑠璃と水晶と〔合計〕四宝より作られた四つずつがある。それら池の岸には、宝の樹〔すなわち〕七宝すなわち金と銀と毘瑠璃と水晶と赤真珠と石髓(rdo'i snying po)(※2)と緑玉の樹〔である〕麗しく見て好ましいものが、生えている。それら池には普く蓮華が生じている。(以下、省略)」

※1) 七宝には異説がある。中村元『仏教語大辞典』(縮刷版 1981) p.587 を参照。カマラシーラ著『金剛般若経の註釈』D Sher-phyin No.3817 Ma 226a5 には『聖妙法蓮華経』に出ているものであるという。Cf.大正9 No.262 p.8c 「方便品」

※2) A Kyā yongs 'dzin Blo bzang don grub (1740-1827) 著『律の因縁の名・表記の釈論 - 知者に喜びを生ずるもの』(Kha 21b4-5) に、「石髓(rdo'i snying po) は、水中の石から生じたさまで詳記するので、「石髓」というし、色が黒いのに赤い光が生ずると、また色が赤いと説明する。或るものには、margad(緑青玉)について説明しているものも見られる。」という。Cf.坂本幸男、岩本裕『法華経』(1962) p.341; また、

同著『菩提道次第大論に出る表記註釈 — 必要なもののまとめ』(Toh.No.6569 Ka 37a5)に、「*indranī* について「青自在」という。石の種類の子の寶石であり、変形したので、*andranyil* という。」という。*indranīla* は「帝青」と漢訳され、サファイアやエメラルドをいう。

八功德の水は、甘い、冷たい、柔らかい、軽い、浄らか、無臭、喉を痛めない、腹を痛めないといった八つの性質をもった水である。『俱舎論の自註釈』AK.IIIには、雪山の彼方にあり、四大河が流れ出るもとの無熱惱池が、八功德の水に満たされているが、神変の無い人はそこには行きがたいとされている。Cf.山口益、舟橋一哉『俱舎論の原典説明 世間品』(1955) p.380; 上に出した『弁別釈』をも参照。

(7) 上に出した『弁別釈』を参照。そこでは、池の蓮華に果実があるかのようにになっているが、『無量寿経』では、七宝の木々に七宝の根、幹、枝、葉、茎、花、果実があり、すべてが金の網や七宝の蓮華で覆われている、と説かれている。Cf.『浄全』23,p.270; チベット人は蓮華を見たことが無いので、不正確な記述になったのであろうか。

(8) 『弁別釈』(69a6-b4)に次のようにいう —

「(※1) さらにまた国土の功德は、かの国土には「八難 (69b) と悪趣」という声(ことば) (※2) も〔耳に〕知られていません (※3)。同じく、貪瞋癡の三など煩惱〔である〕五毒 (※4) と、三毒 (※5) と、それが生じさせた風、胆汁、粘液などの病 (※6) と、男魔、女魔などの〔八万の〕魔と、迫害し、盗む、奪うことを為す敵と、貧乏で困窮した有情が互いに闘争しあう (※7) などの苦〔受〕となったものすべてが、かの国土に生起すること〔が無いの〕はもちろん、耳により聞いた経験がないので (※8)、かの大楽の国土に生まれますように！」

※1) 『大楽国土誓願の註疏』p.292 にはここで「有情〔世間〕の功德」という項目を立てている。

※2) 『無量寿経』では、三悪趣の無いことは法蔵比丘の誓願の第一と、釈迦牟尼のアーナンダへの説法に言及される。Cf.『浄全』23,p.236,268

※3) 『大楽国土誓願の註疏』p.293 には、「なら、その苦を経験することはもちろんです」と補う。

※4) 五下分結すなわち食欲、瞋恚、有身見、戒禁取見、疑のことである。

※5) 『大楽国土誓願の註疏』p.293 には、「それにより引き起こされた殺生などの業も無い。因〔である〕集〔諦、すなわち〕業と煩惱それらにより生じさせられた果〔である〕苦の差別〔例えば〕病」などとつなげている。

※6) ヴェアスバンドゥ著『縁起経釈』(D No.3995 Chi 21b5-22a1)に、風は厳密には病そのものではないが、風 (Skt.vāta,Tib.rlung)、胆汁 (Skt.pitta,Tib.mkhris pa)、涎液

(Skt.śleṣman,Tib.bad kan) という三要素の不調和である過患 (Skt.doṣa) が、病気になるとされている。『俱舍論の自註釈』 III (D No.4090 Ku 143b2; 和訳 山口益・舟橋一哉『俱舍論の原典解明 世間品』1955,p.349) には、断末摩の個所に言及されて、末摩を断ずるのは水・火・風によるとされ、「なぜに地の界によってでないかという」と、第四の過患は無いから。風と胆汁と涎液が三過患である。それらの中心は適宜、水と火と風の界である。」などという。『俱舍論の自註釈』 IV ad 58 (D No.4090 Ku 196b3; 和訳 舟橋一哉『俱舍論の原典解明 業品』1987,p.283) には、心狂業の個所にその一因として四大種の不調和が挙げられて、それは風と胆汁と涎液が動乱したことでありとされている。ダルマキールティ著『量評釈』 II 148 には、涎液など三要素が貪瞋癡の要因であるという主張への批判がなされているが、これら三要素の診断は食事療法と結びついていた。テンギュールの gSo-rig-pa (医方明部) に個々の記述は見られるが、これら古代インドの医学に関しては、テリー・クロフォード『チベットの精神医学』(中川和也訳,1993) pp.122-128 に研究されている。Cf.ツルティム・ケサン、藤仲『チベット仏教 論理学・認識論の研究I』(2010) p.183,278,298, 中川和也「大乘涅槃経とアーユル・ヴェーダ」(Cf.『仏教学』26,1989) pp.27-28; 『大楽国土誓願の註疏』 p.293 には、'du ba bzhi (四つの和合) という。これは本来、風など三つの和合をいうが、そこに病をも加えたのであろうか。

※7) 『大楽国土誓願の註疏』 p.293 には、「殺生、切断」という。

※8) 『弁別釈』は文章の順序が分かりにくい。『大楽国土誓願の註疏』 p.293 には、「苦すべての声(ことば)ほども、その国土においては耳により聞こえる経験がないのなら、直接的に生起すること〔が無いの〕はもちろんです」という。

(9) 『親友書簡』vv.63-64 (D No.4182 Nge 43b3; 和訳 瓜生津隆真『大乘仏典 14 龍樹論集』(1974) p.333, 北島利親『龍樹の書簡』(1985) p.224) に次のようにいう —

「邪見を持つことと、畜生・餓鬼・地獄に生まれることと、勝者の教えが無いことと、辺境に野蛮人として生まれること、愚かで啞者なことと、長寿天とのどれにでも生まれる、という過失の八難です。それらを離れた閑暇を得てから、〔輪廻の〕生を退けるために勤めてください。」

(10) 『弁別釈』(69b4-70a4) に次のようにいう —

「かの国土には、ふつうの女は無く、胎生も無いし、みなすべての者が蓮華の蕊から誕生なさったし、すべての者の身体には大小と好悪の差別が無いし、金の色のように浄らかで明瞭です。頭における頂髻(70a)と足における〔千幅〕輪など三十二の妙相、八十の随好の莊嚴と、神変・天眼・天耳・宿住を憶念する〔神通〕、他心を知る神通〔など〕五〔神通〕と、肉〔眼〕・天〔眼〕・慧〔眼〕・法〔眼〕・仏眼〔という〕五眼すべてへの自在

もまた (※1)、仏の功德と無差別であると仰っています (※2)。そのような功德が無量であるかの国土に生まれますように！」

※1) kun la mnga' yang とある。訳註 17 を参照。

※2) 典拠は未確認。

- (11) 『無量寿経』では法蔵比丘の誓願のうち第三十六 (魏訳では第三十五) に、我が名を聞いて浄信、菩提心を生じ、女身を厭うたものが、再び女身を得ることになるなら、正等覚しないように、という。また、釈迦牟尼が極楽の莊嚴を説く個所において、極楽の者たちの享受は他化自在天と同様であり、彼らは欲すとおりの無量宮において七千ずつの天女に囲まれ、戯れ、楽しんでいるとされている。Cf. 『浄全』 23,p.248,282
- (12) 『無量寿経』 (Cf. 『浄全』 23,p.308) によれば、極楽における胎生は蓮華の胎におけることである。詳しくは『佛教大学総合研究所紀要』 20 (2013) に発表予定の中御門論文の訳註 3 参照。
- (13) 『無量寿経』 (Cf. 『浄全』 23,p.236,252) では、法蔵比丘の誓願 (チベット語訳) の第三に、極楽の者の身が金色であること、誓願の第四には極楽の者は姿形の違い、好醜が無いこと、誓願の第四十二に聞名して他国土に生まれた者が諸根を欠いていないことが、言及されている。チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第 42 章「国土の選択・財宝を受けとる船主」にも身体の金色が言及されている。Cf. 和訳 藤仲孝司 (2006) p.81
- (14) 『無量寿経』 (Cf. 『浄全』 23,p.242) では、法蔵比丘の誓願の第二十に、極楽の者は大人の三十二相を具えることが言及されている。ナーガールジュナ著『宝鬘』 (漢訳『宝行王正論』) II 76ff. には、三十二相がそれぞれ善行により生ずることが説かれ、そういう行いが勧められている。マイトレーヤ著『現観莊嚴論』 VIII 12ff. には、三十二相、八十随好を自体としたのが仏の受用身であるとして、各々が説明されている。『山法・独居修行の教誡』第 42 章「国土の選択・財宝を受けとる船主」にも言及されている。Cf. 藤仲孝司 (2006) p.81
- (15) 『無量寿経』 (Cf. 『浄全』 23,p.236) では、法蔵比丘の誓願の第五から第九に、極楽の者は五神通を具えることが言及されている。なお源信『往生要集』が説く「浄土十楽」のうち、第三の身相神通楽に、三十二相の具足、五神通の獲得が挙げられている。『大楽国土誓願の註疏』 pp.293-294 には、五神通の内容を次のように詳記している。－
- 「五神通を具えた力により、コーティ・ナユタの国土に刹那・須臾ほどに往くことができることと、そのすべてが見えることと、それらに有る粗大・微細な音声すべてが聞こえることと、それらにいる有情たちの心相続を知ることなどです。」
- なお『山法・独居修行の教誡』第 42 章「国土の選択・財宝を受けとる船主」にも言及されている。Cf. 和訳 藤仲孝司 (2006) p.81
- (16) 『無量寿経』 (Cf. 『浄全』 23,p.300 l.11ff.) では、釈迦牟尼が極楽の衆生について説明する個

所に、「肉眼〔すなわち〕善く区別すること、天眼〔すなわち〕現成すること、慧眼〔すなわち〕証得を了解すること、法眼〔すなわち〕彼岸に至ったこと、仏眼〔すなわち〕成就し講説するもの」が言及されている。『望月仏教大辞典』p.1170a-b には『大智度論』第三十三によりそれらが各々前者を補うものであるとされている。他方、『大楽国土誓願の註疏』p.294 には次のようにいう —

「肉眼と天眼と慧眼と法眼が在るの (mnga' ba) と、仏眼もまた随順するものがあるので、そのように五眼もまたすべて〔の者〕に在るの (mnga' ba) と、さらにまた、自他の想いが無い (※1) し、有情すべてに対して慈と悲の心を持っている。^{ダーラニー}総持と弁才などの智慧は海と等しい (※2)。静慮 (禪定) に自在を得たので、知はスメール山と等しいなど無量の功德により相續が普く満たされたその国土 (以下、省略)」

※1) 訳註 19 を参照。『中辺分別論』II 14 への世親釈において、菩薩は第一歡喜地において法界の遍満を知って自他の平等を悟るとされている。『十地経』の「第一歡喜地」には、内容の一致はあるが、文言は一致していない。

※2) 『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.300) の同じく極樂の衆生について説明する個所には、「智慧は大海と等しい。知はスメール山と等しい。多くの功德を積んだ」という記述はあるが、「^{ダーラニー}総持と弁才など」への言及はない。

なお、五眼の典拠について、『大楽国土誓願の註疏』p.294 には、「五眼の功德と教の結合は多いの〔で、ここにはそれ〕を書いていない。」というが、『現觀莊嚴論』I 21-24 に大乘の十教誡の第七として出て、第八の六神通とともに勝進道を行ずるものとされている。また、ツォンカパ著『現觀莊嚴論の釈論・善積金鬘』Toh.No.5412 Tsa 133a4ff、タルマリチェン著『現觀莊嚴論の釈論・心髓莊嚴』Toh.No.5433 Kha 69a2-4 には教証を含めて詳論し、肉眼は資糧道から、天眼は加行道、慧眼は見道、法眼は見道の後得から、仏眼は仏地そのものにおいて、随順するものは第八地からあるとされている — これは直前に出した『大楽国土誓願の註疏』も指摘していることである。極樂の者たちは仏眼を含めた五眼を持っているとされるので、第八地以上の菩薩であるということになる。『弁別釈』64a には、極樂往生して授記を得てから極樂往生した者は第八地のものであると言われることに合致する。チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第 42 章「国土の選択・財宝を受けとる船主」(Cf.和訳 藤仲孝司 (2006) p.68) には、マチク・ラブドンマを典拠として密嚴淨土には第八地以下の者は生まれないといい、伝マチク・ラブドンマ著『誓言二十一』には、「極樂以外の他の広大な国土世界に生まれるには、〔煩惱と所知の〕あらゆる二障を断ってから、第八地以上を得ることが必要である」という記述が見られる。第八地以上が生まれることの典拠は未詳であるが、例えば『大乘莊嚴經論』XI 45-46 の、意 (染汚の意) と取 (轉識) と分別 (意識) の転依により、無分別と国土と智と事業の四種類の自在を獲得することが説かれており、その第二、国土の

自在は第八地から獲得されるものとされている。Cf. ツルティム・ケサン、藤仲『チベット撰述 金剛般若経註 解脱に往く善き道・甚深なる義の明らかな太陽』(2010) 註 240; 長尾雅人『『大乘莊嚴経論』和訳と註解 (2)』(2007) pp.103-104

(17) kun la mnga' //とあり、mnga'は動詞「在る」、名詞「自在」のうち、前者のようであるが、上記のように『弁別釈』は名詞「自在」として読んでいるようであり、翻訳は「五神通と五眼すべてに自在である。」となる。直前に出した『大楽国土誓願の註疏』では yang (もまた) の位置からして、動詞としての読みを支持するようである。

(18) 『弁別釈』(70a4-b5) に次のようにいう —

「住んでいる住居において困難は必要無くて (※1) 自然^{じねん}に生じた様々な宝から成就した無量宮、もしくは百千により莊嚴されたものにおいては、何でも欲しい [受用すべき] 資財すべてが、意に念ずることほどにより生起する [。それ] 以外、[追求・] 努力、達成は必要なく、必要な欲しいものは自然 (70b) 任運に成就している。私たちは同等であり、あらゆる必需品は願わなくて (※2)、知足を具えたものであると仰っています。「私とあなた」ということが無くて、我と我執は無いのです (※3)。施与を与える対境と忍を修習する対境も無いので、南瞻部洲などに住する諸菩薩について誓願すると、仰っています (※4)。

各自が欲しいものは何でも供養雲が (※5) 掌から生起する (※6)。そこには敵を調伏する、友を保護することなどが無くて、すべての者が無上の大乘の法 [のみ] を受用する [というそれら] 安楽・幸福すべてが生起するその国土に生まれますように！」

※1) 『大楽国土誓願の註疏』p.294 に「福德の力より、困難により製造されたのでない」という。

※2) rang re tsho 'dra 'dra mi mkho dgu mkho ma yin par とあり、読解が難しい。mi を削除した暫定的な翻訳である。『大楽国土誓願の註疏』p.294 には、これに該当する文章が無く、「無知足ではないし」と簡略な説明である。『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.298) では、釈迦牟尼が極楽の衆生について説明する個所に、「その仏国土における有情たちは、執持の想いを何も生じさせない。」などという。

※3) 『大楽国土誓願の註疏』p.294 には、「法と人との我執も無い。」といい、「現在、ここ [娑婆世界] には住宅と財宝について集積・保護・増大の三つが必要な、苦について厭離が生じたし、その国土を欣求することが必要です。」という。

※4) 典拠未確認。教化のためにあえて南瞻部洲への生を願うという意味であろうか。

※5) 『大楽国土誓願の註疏』p.295 には、「ただ思うことほどにより」と補足する。『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.244) では、法蔵比丘の誓願の第二十五に、その浄土の菩薩は無数無量の国土の諸仏に対して、供養しようと心を生じただけで、たちまち諸

仏が悲により摂取し、それら供養を受けられるようになる、という内容がある。

※6) 『大楽国土誓願の註疏』 p.295 には、「だから、刹那ごとにも福德の大なる資糧を集積したのです。ここ〔娑婆世界〕においては、福德を積もうと欲しても、かつての業〔によって〕の供物は稀です。」と補足する。

(19) 『無量寿経』の法蔵比丘の誓願の第十（チベット訳、魏訳では第十一；Cf.『浄全』 23,p.238）に、「世尊よ、もし私のその仏国土に生まれた有情たち彼らが、たとえ自己の身を執持する想いを幾らかでも生じさせるなら、そのかぎりは、私は無上の正等覚に現等覚しません。」という。また、釈迦牟尼が極楽の衆生について説く箇所（Cf.『浄全』 23,p.301）に、「その極楽に生まれた菩薩彼らには、他者の想いが無い。自己の想いが無い。自己のもの（我所）の想いが無い。」などという。また、チベット訳『無量寿経』には無い記述であるが、魏訳には冒頭近くの、諸菩薩の勝れた徳を讃歎する箇所に「於諸衆生、視若自己」という。Cf.香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』（1984） p.71；訳註 16 へ出した『大楽国土誓願の註疏』をも参照。

(20) 『普賢行願讚』には v.40 へのディグナーガ釈に「供養雲」、v.60 へのディグナーガ釈に「変化の神変雲」への言及があるが、掌から生ずるという記述はない。

(21) 『大楽国土誓願の註疏』 p.295 には次のように補足している —

『妙法蓮華経』（※1）に、「声聞と独覚により放棄されたし」といい、『光経』（※2）に「浄らかな声聞」と説かれているので、その〔極楽〕国土には、寂静の辺（極端）一つに陥った声聞・独覚は無いし、大正覚になる声聞の阿羅漢と一生補処の大菩薩が充たしている。よって、不可思議変易の死去（※3）などが無いので、身心に安楽・幸福の功德すべてが生起するその国土に」

※1) 未確認。声聞・独覚を欠如しているという意味、または声聞・独覚は大乗の修証とその果としての仏国土を放棄しているという意味か。*Padma dpar po* はあるいは『悲華経』のことをいうのかもしれない。

※2) 未確認。'Od mdo（光経）は『無量寿経』のことをいう場合が多い。極楽浄土の声聞も実は菩薩であることについて、『阿弥陀経』（Cf.『浄全』 23,p.346）に、「シャーリプトラよ、さらにまたその仏国土に生まれた有情すべては不退転であり一生補処の菩薩ばかりである」という。『無量寿経』（Cf.『浄全』 23,p.248 ll.11）では第二十一願のいわゆる「一生補処の願」にもそうしようとの誓願が出ているし、極楽の功德を説く箇所（Cf.『浄全』 23,p.296 ll.1-4）では、三世において極楽浄土に生まれる菩薩はすべて一生補処になって無上の正等覚を現等覚するとも言われている。

これからすると、『大宝積経論』（D No.4009 Ji 236a7-6）、『法華経論』（Cf.大正 No.1519 p.9a）、『思釈炎』（Cf.D No.3856 Dza 173a7-b1）に四種声聞が言及されるうち、増上慢の声聞はもちろん、ひたすらに寂静に赴く声聞もいない。そして、正覚

に転向した声聞（すなわちもとは声聞であった者）もいなくて、有情の利益のための自らの姿を化作した変化の声聞のみがいるということになる。

- ※3) 『勝鬘經』に、無明住地を縁とし無漏業を因として三乗の人の三種類の意成身が生じ、それによって不可思議変易の死去があるとされている。惑業生の雑染を滅して如来の本性を実現しないかぎり、この死去を免れないので、常波羅蜜は獲得されないという。この内容は、チベットでは『宝性論』での引用、論及（Cf.高崎直道『宝性論』1989,pp.57-59）を通じて知られている。

なお、『現觀莊嚴論』VIII 12-32 には、三十二相、八十随好を自体とした牟尼の色身が受用身である。なぜなら、大乘の法を完全に受用する五決定により殊勝になった身であるから、とされている。五決定は、色究竟天のみに住するという処決定、円満な相好により飾られているという身決定、すべての聖者菩薩に囲まれているという眷属決定、大乘の法だけを説くという法決定、輪廻のかぎり寂靜に住しないという時決定である。色究竟天のみに住するというのは極樂浄土に住することと矛盾するようであるが、例えば、ツォンカバは極樂往生したが、それでも密嚴浄土に住しながら変化の一つにより極樂浄土に住しているといわれるように、会通できないわけではない。

- (22) 『弁別釈』(70b5-71b4) に次のようにいう -

「(※1) 午前の時、四方から芳しい香りの風により、諸々の宝樹は揺れるし振動する (※2) ので、快い香りの芳香を具えていて見て快い (71a) 花の大雨が降る。それら花々も、その国土において人の身の丈 (※3) 七つほどに遍満して住しているし、天の衣〔である〕カーチャリンディカ (※4) のように柔らかくて触れると安楽になる。午前の時が過ぎた直後、片々の風により花の芯すべては無くなる。そのときかの国土は空寂であって (※5) 喜ばしくなるし、また前のように新しい花々が敷かれる (※6)。同じく、〔日中と午後と〕日暮れと夜の〔夜中と〕明け方 (※7) もまた、それと同様です。

さらにまた、(※8) 樹木と蓮華と水・風すべてからもまた、快い美しい色、聞きやすい声、芳しい香、甘い味、柔らかい所触などの受用〔されるべき資財による〕供養の雲の蘊（あつまり）もまた常に生起する。(※9) [不浄な、劣った] ふつうの女は (71b) いないが、各菩薩より変化された天女と天子の衆、供養妃の遊戯に〔現象として〕浮かんだのが多く〔すなわち〕七千ずつが常時に供養する。

(※10) [行住坐臥の行儀について] 坐りたいと欲するとき、宝の無量宮、そして寝たいと欲するとき、それら〔宮殿〕に様々な宝から成立した好い座の上に、造作された天の衣など、多くの絹布の臥具を敷いたもの、および模様の枕、近七宝 (※11) も有る (※12)。」

- ※1) 『無量寿經』の極樂浄土の功德を説く箇所（Cf.『浄全』23,pp.282-284）に対応する文章がある。

- ※2) skul bas (勤めるので)とも見えるが、『無量寿経』の対応箇所より sgul bas と読む。
- ※3) 印刷が不鮮明で gong tshad とも見えるが、『無量寿経』の対応箇所 'geng ba より、'geng tshad と読む。『大楽国土誓願の註疏』p.295 にも 'geng ba'i lus tshad とある。
- ※4) 印刷が不鮮明で pa ? li ? ka などと見えるが、『無量寿経』の対応箇所 ka tsa lin da を採る。
- ※5) dben zhing とある。『無量寿経』の対応箇所には bde ba dang / (楽であり) とある。
- ※6) bkram par byed la とある。『無量寿経』の対応箇所には mngon par 'thor ro // とある。諸行無常のあり方ではあるが、「虚しい」「はかない」といった喪失、追憶、悲嘆を含意した情緒的なあり方ではない。『大楽国土誓願の註疏』p.295 には、「古い前の花々は風により払われて、新しい花々は前のように敷くし、昼三回、夜三回に降ると、時折に空寂であり、大地の功德により美しいし喜ばしく住する。」という。
- ※7) nam gyi tho rangs とある。『無量寿経』の対応箇所には nam gyi gung dang tho rangs (夜中と夜明け) とある。『無量寿経』はこのようなことが昼夜三回ずつ起こるし、このような風が身体に触れるなら、滅尽定に入った比丘のような楽になることを述べている。昼夜三回ずつ、一日六回ということは、「世間解」である仏が有情を御覧になる回数、有情が行を行う回数にも対応し、そこには散華ということも関わってくるであろうから、直前の「日中と午後」という記述の欠如を含めて、不十分な記述である。他方、『大楽国土誓願の註疏』p.295 は正しく「昼三回、夜三回に」と述べている。
- ※8) 『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.280)には、極楽において資具の享受は思うがままであり、それが欲界の最上位の神々の境地に譬えられている —
- 「アーナンダよ、その極楽世界において〔過去に〕生まれた〔有情〕、〔現在に〕生まれる〔有情〕、〔未来に〕生まれるであろう有情彼らすべてはまた、色と顕色(いろ)と力と威力と面積と自在と福德の蓄積と神通と衣と莊嚴と園林と無量宮と楼閣を〔過去に〕受用したそのようなものと、色と声と香と味と所触を受用したそのようなものと、〔現在に〕受用するのと〔未来に〕受用するであろうそのようなすべてを具えている。例えば、他化自在天と同じである。」
- また、直前の記述に対応する『無量寿経』の続き(Cf.『浄全』23,p.284)にも、極楽世界には時々、香水の雲の雨が降り、天の花、天の七宝、天の梅檀の粉香、天の傘、幢、幡の雨が降る。天の蓋、天の傘などが虚空に持たれるし、天の音楽をならして天女たちも舞うという。
- ※9) 次の訳註23を参照。

※10) 『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.282)にも次のように無量宮、座席、衣に言及する –
「それら^{いろ}顔色と表徴^{かたち}と形色と面積空間と様々な宝の楼閣〔すなわち〕百千の莊嚴により莊嚴されたもの、造作された天の衣を敷いた宝の座、模様を置いた枕を持った無量宮、〔すなわち〕欲するとおりのそれら無量宮が、彼らの面前に生起する。」

※11) 未確認。七宝に準ずるものという意味であろう。

※12) 『大楽国土誓願の註疏』p.296には、「ただ思うほどにより生起する」という。

(23) 『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.283)には、「欲するとおりの無量宮が、彼らの面前に生起する。彼らは無量宮の成就したそれらの中で、天女七千ずつにより取り囲まれて、仰ぎ見られて居り、戯れ、喜び、歓楽を行ずる」などという。『大楽国土誓願の註疏』p.296には、「仏の変化の天女と天子の衆と、供養妃七千ずつなどが、各人に対しても常に様々な供養でもって供養する」という。

(24) dar zab. 形容詞 zab mo は「深い」という意味であるが、文脈に適合しない。zab chan (緞子)の用例を考えて翻訳した。

(25) 『弁別積』(71b4-72a4)に次のようにいう –

「変化の鳥(※1)と樹(※2)と河(※3)と虚空から天の音楽などより、聞きたいと欲するとき、(※4)無常と無我などの妙なる法音を響かせるので、諸菩薩は仏への随念を離れないし(※5)(72a)、(※6)内に正しく安住させるなど欲しないときには、耳に微細な声ほども響かない。

(※7) 甘露の池と河それらもまた、暖かさを欲するなら暖かさと、冷たさを欲するなら冷たさと、欲するなら^{くるぶし}踝が沈むほど、同じく膝が沈むほど、喉が沈むほどなど〔各自が〕何でも欲することが、彼にとってそのとおりに生起する。思惟〔すべてが〕意のままに成就するその国土に生まれますように！」

※1) 『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.270)に、「如来の変化の様々な鳥〔すなわち〕快い声を持ったものの衆により莊嚴されている。」という。『大楽国土誓願の註疏』p.278に「カーランダなど」という。これは『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.278)に鳥の種類を列挙している個所に対応するのであろうが、漢訳の諸本にその個所は欠如している。Cf.香川孝雄『無量寿経の諸本対照研究』(1984) pp.208-209

※2) 『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.270-274)には、七種の宝の自性清浄なものから根、幹、枝、葉、花、果実ができた宝樹が満ちていて、風により動くと、それらより微妙で快い声が生ずるとされている。周辺は、七宝のパナナ樹、ターラ樹の列に囲まれており、すべてが金の網により覆われているという。

※3) 『無量寿経』(Cf.『浄全』23,p.276)には、幅一ヨージャナから五千ヨージャナまで、

深さも十二ヨージアナの様々な大河があり、それらすべてには、様々な芳香の水が流れ、宝の花びらの集まりが降ってくる。異なった妙なる多様な音声を持っていて、それらの大河からは百千コーティの支分を持った天の歌、音楽、すなわち名手の行うのより快いものが、生起する、という。

※4) 『無量寿経』(Cf. 『浄全』 23,p.276,pp.278-280) には次のようにいう —

「それら大河より次のような種類の声が生起する一遍知されるべきことと、了別されるべきことと、表詮されないことと、安楽であることと、快適であることと、歡喜すべきことと、妙なることと、快いことと、聞いて飽きないことと、聞きやすいことと、無常であることと、寂靜であることと、無我であるということと、聞いて樂であること—それらすべてが、彼らの耳根に響く。」

「アーナンダよ、その水より快い音声が生起するそれにより、その仏国土におけるすべてを具えた眷属に、分からせる。そこにおいて水の岸に居る有情たちは、この声が私たちの耳根に響かないように！と欲するなら、それは彼らの天耳に響くことにならない。聞こえてほしい形相の声は、耳にそのような形相の快い声が聞こえる。すなわち、仏の声と法の声と僧の声と波羅蜜の声と〔十〕地の声と〔十〕力の声と〔四〕無畏の声と〔十八〕仏不共法の声と神通の声と〔個々に了知する四〕無礙解の声と空性と無相と無願と無作と無生と無起と無事物と無滅の声と、寂靜と極寂靜と最寂靜の声と、大慈と大悲と大喜と大捨の声と、無生法忍と灌頂地を得た声が、聞こえる。彼はそのような形相の声が聞こえて、歡喜と最高の歡喜の広大なものを得る。空寂を具え、離貪を具え、寂靜を具え、滅を具え、法を具え、正覺が円成する善根を具えた声が、生起する。」

『大樂国土誓願の註疏』 p.296 は、「三宝と十地と十波羅蜜など」とまとめている。

※5) 『大樂国土誓願の註疏』 p.296 には、仏隨念ではなく、「法音が響くのが聞こえて、それらを隨念するのを離れない」という。

※6) 『大樂国土誓願の註疏』 p.296 には、「内に等持（三昧）に入定するなど」という。

※7) 『無量寿経』(Cf. 『浄全』 23,p.278) には次のようにいう —

「そこにおいて、有情たち〔すなわち〕それら河の岸において財物無き天の歡喜と遊戯を経験したいと欲する者たちが、それら河に入るとき、欲するなら水はくるぶし踝が沈むほどに住する。欲するなら、水は膝が沈むほど、欲するなら腰が沈むほど、欲するなら腋の下が沈むほど、欲するなら喉が沈むほどに水が住する。天の歡喜も生起する。そこにおいて有情たちが、「水は冷たくなれ！」と欲するとしても、彼らにおいて涼しくなる。「涼しくと暖かくなれ！」と欲するとしても、彼らにおいて彼らにおいて水は涼しくと暖かく、安樂になる。」

水が「甘露」であるとの表現は未確認である。『阿弥陀経』(Cf.『浄全』23,p.344 ll.3-4)にはその代わりに「八功德水」だとされている。上の訳註6を参照。Cf.藤田宏達『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』(1975) p.236

- (26) 本節の典拠は、『悲華経』(‘*Phags pa sNying rje pad pa dkar po zhes bya ba theg pa chen po’i mdo*; D mdo-sde No.112 Cha, P mDo-sna-tshogs No.780 Cu.、[梵本] Isshi Yamada ed. (1968)、[漢訳] 北涼曇無讖訳『悲華経』(大正3 No.157)のうち、釈迦牟尼仏が穢土成仏を誓った前世の因縁などを語る「大施品第三」である。Cf.宇治谷祐顕『悲華経の研究』(1969) p.146ff.;

無量寿仏の寿命については、『無量寿経』の諸漢訳には十劫、十小劫、十八劫、十大劫といった諸説が見られ、『阿弥陀経』には無量無辺阿僧祇劫とされている。また、『悲華経』と授記の経緯は別であるが、成仏するときの仏号や国土名が共通した内容により、阿弥陀三尊の授記を語った『観音授記経』には、寿命の無量であることと入滅することが同時に説かれている。これに関して『往生要集』の大文第十、問答料簡には、道綽著『安樂集』、迦才著『浄土論』を引用して会通している。Cf.石田瑞麿『往生要集(下)』(1992) p.131ff.; 斎藤舜健『『観世音菩薩授記経』所説の阿弥陀仏の入滅』(『印度学仏教学研究』44-2,1996) 『弁別釈』(72a4-76a6)には次のようにいう —

「第三: 勝者の意趣を完成させることを誓願する (※1)

それもまた、(※2) かつてガンジス河一つの砂ほどの無数劫を越えたなら、[この] 仏国土において「善持」という大劫(※3)に、四[大]洲を統治する転輪王「無諍念」(※4) というもの(72b)と、彼の面前に唱誦(※5)バラモン「宝海」(※6) というものが出たので、彼には、息子[すなわち] 大士の相好により飾られた、光は[両腕を広げた] 一尋を満たし、身を見飽きないものが、誕生した。直後に虚空の数十万の諸天が供養をした。「海蔵」(※7)と名をつけられた。その彼こそが或る時、[髪、髭を剃り、] 衣を壊色に染めて[出家し]、現等覚したので、お名前を「宝蔵仏」(※8) というものになった。(※9) それから、都の外側に「ジャムブ洲の園」という園林が有るそこに、眷属の幾十万コーティ・ナユタの声聞とともに居られた。それから王はご招待して、三ヶ月の期間、仏および眷属に対して衣と食べ物と(73a) 臥具と座と資具により侍奉もうしあげたし、[転輪] 王の七宝により供養した。同じく「不眇」など千の王子と、八万四千の領主、勝れた妃、吉祥天たちもまた三ヶ月ごとに侍奉した(※10)。そのとき、そのバラモン「宝海」は、自己の眷属[である] 千のバラモンを発心させた。ジャムブ洲すべてを巡って、男、女、童子、娘たちの或る者を[三宝] 帰依に立たせた(※11)。或る者を[無上の正等覚へ] 発心させてから、再び自らの故郷に到着してから、七年間、仏[とその僧伽を招待して、無諍念王と同じ資具の円満すべてでもって、仏と僧伽] に侍奉した。それから、そのバラモンの思惟においては、「[私はコーティ・ナユタの有情を無上の正等覚へ発心させたが、]

この〔無諍念〕王は〔果報として〕天の統治を欲するのか、人の統治を欲するのか、声聞〔乗〕または(73b) 独覚〔乗を欲するのか〕、仏が欲すること〔すなわち無上の正覚〕(※12)へ誓願を立てるのか。」と、〔仏などが〕夢において授記を為さったなら分かるのに(※13)、と思った。

夢において、十方のガンジス河の砂ほどの仏国土の仏陀が見えたのと、彼ら諸仏が自己に蓮華〔すなわち〕花卉が金、茎が銀、芯が毘琉璃、雌薬が瑪瑙より造られたものを、授けた。それら蓮華は、日輪のようにすべてを照らし、上には七種の宝の傘、日輪各々からもまた六十コーティが生じて、自己の心臓に入った(※14)。身体は千ヨーヅナほどになったし、例えば〔浄らかな〕鏡に顔が浮かんだのが見えたように、身体の中に、六百万コーティ・ナユタの菩薩〔すなわち〕(74a) 蓮華に結跏趺坐して静慮(禪定)を修習する者たちが、見えた。周囲には蓮華が有る―そこには鏡の音が鳴らされる。それから「無諍念」〔転輪王〕は身体を血に塗られて、猪の顔になってから走り、多くの生類を殺して食べてから、エランダ樹の幹の根元に坐っていたが、多くの生類が来てから、こちら〔の身体〕を食べて、足骨までに至った。〔生を変えて〕復活してからあちら〔の身体〕を食べるなど交替しつづいた。さらに、〔転輪王の〕王子たちが猪、象、水牛、獅子、狼、狐、猿たちの顔になって、同様にした。或る王子は、肉菘の花により飾ったし、水牛の車に乗って、分かれ道に入って(74b)、右方向を見て行く。それから梵天と帝釈天、護世神(※15)たちが来て、バラモンに語った―〔すなわち〕「バラモンよ、あなたの周囲に蓮華が有るそれは、第一の一つは王の分け前として捧げなさい。他は王子たち、残りは小王たち、それ以外の人々に施しなさい。」と命令したので、バラモンは「諸天が命令したとおりにしよう。」と語ったので、バラモンは座に坐ったまま目覚めた。(※16)

その夢を仏に申し上げたので、大光明、〔十方の〕国土〔の諸仏世尊〕(※17)が見えたのと、諸仏から蓮華を送られたのと、それから光が生じたのは、あなたが二百五十年、ジャムブ洲を遊行して、多くの有情を正覚に立たせたそのことです。傘などはあなたが無上の正等覚者になる予兆(75a)です。〔無諍念〕王などがそのようになったのは、不浄な誓願の力により六種類〔の趣すなわち生存状態〕(※18)に苦を経験するのです。水牛の車に乗ることなどは、或る者は劣った道(※19)を誓願するものであるさまなどを、広汎に述べられた。

そこで、バラモンは〔無諍念〕王などに対して正覚へ発心するようたびたび申し上げたので、そのようになさることを承認なされた。そのとき、宝蔵仏は「鏡の莊嚴」(※20)といわれる等持(三昧)に入定した。その威力でもって、王、大臣たちもまた、十方の千の仏の諸世間の塵ほどの〔無量の〕大功德が見えたので、すべての者が正覚へ発心したし(※21)、清浄な誓願を立ててから、〔宝蔵仏により、この〕王は〔未来に〕無量寿仏とし

て出現する〔という〕授記をされた (75b) (※22)。

(※23) それから、〔果報を求めるべきでないことをバラモンが論じたので、〕第一王子「不眇」は、無量寿〔仏〕がどれほどか住される〔間〕、教えはどれほどか住する間は、〔私は〕菩薩行を学ばし、最後に仏になるとの誓願を立てた〔。そのこと〕により、〔「観自在」という菩薩になり、無量光仏の正法が没した次の夜明けに、〕「光明普勝吉祥積王」〔という仏〕になることを〔、宝蔵仏により〕授記された。

(※24) 〔第二〕王子〔である〕「周囲 (Mu khyud)」童子は発心して、その「吉祥積王〔仏〕」の寿命と教えがどれほどか住する間に、仏子の行を学んで、最終的に仏になることを誓願したので、〔「大勢至」という菩薩 (※25) になり、〕「宝積王 (Nor bu brtsegs pa'i rgyal po)」仏として授記された。(※26) 他の王子たちはかの浄土に対して誓願を立てた。

(※27) 千のバラモンは、賢劫の仏になることを授記された。

(※28) 「宝海」バラモンの思惟は、〔私は彼らを教化し、無上の正覚へ発心させたが、彼ら〕その (76a) すべては浄土だけを誓願したので、五濁の盛んな有情〔すなわち〕凶暴であり苦悩し (※29) 調伏しがたい者たちを、〔自らは〕心でもって忍受されなくて〔すなわち放っておけなくて〕、彼らを自らの様々な方便により調伏することを発心し、(※30) 誓願を立てたので、(※31) 〔十方世界は振動し、諸世間の諸仏が有情たちへ説法する大光明が生じ、〕花の雨が降った。〔宝蔵〕仏は「善きかな」と認可なされた。そして、「未来に私たちの大悲を持った教主になるだろう」と授記された。

それもまた、その極楽国土において正等覚者無量光が、不可思議な無数劫にわたって涅槃しないで住されるかぎり、かの仏の侍者をし、侍奉しますように！」

※1) 『大楽国土誓願の註疏』 p.297 の科文では、「国土の正尊〔無量光仏〕の功德を作意して、侍者と持教者などについて誓願すること」という項目になっている。

※2) Cf. 『悲華経』D No.112 Cha 148a4ff.; 大正 3 No.157 p.174c18ff. Yamada ed. (1968) p.52 l.10ff.

※3) sangs rgyas kyi zhing bskal pa chen po 'dzin pa zhes bya ba zhid 「仏国土、大劫〔取〕というもの」とあるが、仏国土と劫が同格のようになって不適切である。原典の sangs rgyas kyi zhing 'dir bskal pa chen po 'dzin pa zhes bya ba を参照した。また「善持」は漢訳による。

※4) 漢訳の名を用いたが、チベット語訳は rtsibs kyi mu khyud (輻^{ふく}の外周) である。輻の中心が不動でありつつ、輻の活動全体の中核であるのに対して、周縁に位置し、大きく活動していることを象徴した名前であろうか。

※5) don 漢訳は「有一大臣名曰寶海。是梵志種。善知占相。」などという。

※6) rGya mtsho'i rdul 漢訳の名を使用した。直訳すると「海の滴」ということになる。

- ※7) rGya mtsho'i snying po; 漢訳ではすでに「宝蔵」という名になっている。
- ※8) Rin po che snying po
- ※9) 『悲華経』にはここで、かの世尊は法輪を転じて、多くのコーティ・ナユタの有情を上界と解脱の果に立たせた。多くのコーティ・ナユタの声聞衆に囲まれ恭侍されて、都市、町、村落を歩き、やがてかの転輪王の住む他の都に来られた、といった文章がある。
- ※10) D No.112 Cha 153a5-6; 大正 3 No.157 p.176c には、仏と僧伽への供養が二百五十年間、行われたこと、王子たちはそのような大きな布施をしてから、その或る者は帝釈天になることを、或る者は梵天を、或る者は転輪王を、或る者は大きな資財を、或る者は声聞乗を誓願したことを、いう。
- ※11) D No.112 Cha 152a6; 大正 3 No.157 p.176a には、幾十万のコーティ・ナユタの衆生を三宝帰依に安住させ、無上の正等覚へ発心させたことをいう。
- ※12) D No.112 Cha 153b3-4; 大正 3 No.157 p.176c より補足した。
- ※13) D No.112 Cha 153b6-7; 大正 3 No.157 p.176c では、天、龍、夜叉、仏、声聞、バラモンの誰かが私にお告げをしてほしいということである。
- ※14) D No.112 Cha 154a2-3; 大正 3 No.157 p.176c では、「口に入った」という。
- ※15) 大正 3 No.157 p.177a12 では「四天大王」と漢訳されている。
- ※16) 原典では、その夜が過ぎて、食事を準備し、自らが仏と僧伽に差し上げて満足させてから、質問をしている。
- ※17) zhing khams とあり、名詞として扱われているが、原典 D No.112 Cha 155a2 (Cf. 大正 3 No.157 p.177a26) の mthong zhing phyogs bcu'i sangs rgyas bcom ldan 'das kyang mthong la / (見えたし、十方の諸仏世尊も見えた) での zhing は接続詞である。原典より意味を補足しておいた。
- ※18) 原典 D No.112 Cha 157a6ff.; 大正 3 No.157 p.178a6ff. によれば、六道の苦しみをいう。すなわち、彼らは天の中での死去の苦、人の中での老病死と怨憎会苦と愛別離苦、餓鬼の中での飢渴の苦、畜生の中での愚癡の闇、斬首などの苦、有情地獄の中での様々な加虐といった六道の苦しみを欲しがるとし、施与・調伏・律儀の三福業事により天の中ではその統治、人々の中では四大洲の自在を欲しがるとし、皆を利用し、皆に利用されて、輪廻の中で受用を得ながら、長らく苦を経験することになる、などといわれている。
- ※19) 原典 D No.112 Cha 157b2-3; 大正 3 No.157 p.178a18ff. には、三種類の福業事に立った或る者は、自己を調伏して自己が寂滅するために声聞乗に正しく発趣することになる、と言われている。

- ※20) 原典 D No.112 Cha 159b4; 大正 3 No.157 p.178c27; 漢訳「見種々莊嚴」は「様々な莊嚴が現れるもの」という意識である。
- ※21) 原典 D No.112 Cha 159b6ff.; 大正 3 No.157 p.179a によれば、清浄、不浄、寿命の長短、災害の種類など様々な仏国土が見えたので、王は仏に対して、どんな業により菩薩は、仏国土の清浄、有情の思惟の清浄、有情の長寿を得ることになるのかを問うた。仏は、菩薩の誓願によることを説いた。王は、都の閑静な処に戻って、専注して誓願を考え、五濁を離れた仏国土を喜び、善行を廻向した。
- ※22) 無量寿仏の成仏とその極楽浄土が予言されるのは、後の部分 D No.112 Cha 174b6ff.; 大正 3 No.157 p.185b19ff.である。D Cha 175b3ff. (大正 3 No.157 p.185c-186a) には、この第一王子の言葉において、無量寿仏の入滅が言及される。すなわち—
「尊者世尊よ、この無諍念王は、ガンジス河の砂ほどの無数劫一つが過ぎてから、第二の無数劫が至ったなら、極楽世界において無上の正等覚を現等覚することになるし、如来・阿羅漢・正等覚者「無量寿」というものになってから、清浄な国土において清浄な有情たちに対して仏の行いをなさるであろう。如来「無量寿」は無量の劫において仏の行いをなさるし、仏の行いを完了させてから、蘊の余依無き涅槃界に入られるであろうし、そこに入ってからも正法が住するであろう間は、私は菩薩行を行ずるし、私は菩薩になって仏の行いをも致します。正等覚者「無量寿」の正法が晩に没したまさにその夜明けに、私は無常の正等覚を現等覚するならば、世尊は私に無上の正等覚へ授記してください。同じく、私は、ガンジス河の砂ほどの十方世界に住される、〔すなわち〕生きておられる諸仏世尊彼らに対しても、私は彼ら諸仏世尊が無上の正等覚へ授記してください、と言葉により祈願いたします。」
- ※23) Cf.D No.112 Cha 175a3; 大正 3 No.157 p.185c4ff.
- ※24) Cf.D No.112 Cha 176b7ff.; 大正 3 No.157 p.186b19ff. D Cha 176b7 に、rgyal bu gnyis pa Mu khyud、漢訳には「第二王子尼摩」と出ている。「観自在」の名の由来については註 2 9 参照。
- ※25) 授記において「大勢至」の名の由来は註 3 6 参照。
- ※26) Cf.D No.112 Cha 177b1-3; 大正 3 No.157 p.186c
- ※27) Cf.D No.112 Cha 192b1ff.; 大正 3 No.157 p.192b27ff.; 原典には、彼らがバラモンであったことは言われていない。チベット訳では srog chags le lo can khri (懈怠を持った一万の衆生)、漢訳では「十千人心生懈怠」とある。
- ※28) Cf.D No.112 Cha 219a1ff.; 大正 3 No.157 p.204c16ff.
- ※29) mdungs pa とあるが、理解できない。gdungs pa と読んだ。

※30) Cf. D No.112 Cha p.-238b2; 大正 3 No.157 p.-212c. 釈迦牟尼が穢土成仏を願って五百の誓願を立てた有名な箇所であるが、散文体であり、その名数も明確な区別が無く分かりにくいので、研究者によりその推定がなされている。Cf. 成田貞寛「釈迦如来五百大願の成立」(『印度学仏教学研究』13-2)、「五百誓願略経私記」(同 14-2)、宇治谷祐顕『悲華経の研究』(1969) p.229ff.

※31) Cf. D No.112 Cha 242a1ff.; 大正 3 No.157 p.214bff.

他方、『大楽国土誓願の註疏』pp.297-299 には、詳しい典拠の照会はない。末尾の箇所に「これらも『悲華経』に広汎に在すので、拓げるのなら、それを見てください」とのみ述べている。

※) 『大楽国土誓願の註疏』pp.297 には、「その国土は最上変化身の国土であるので、いつかかの無量光がその色身の現れ方の戯論(拓がり)が法身〔である〕寂静〔界〕に逝かれたさまを示してから」といって、変化身の示寂だと説明している。

(27) 無量寿仏の入滅は初期無量寿経(『大阿弥陀経』)に出ている。また『悲華経』(D No.112 Cha 175b5-7; 大正 3 No.157 p.186a) には、仏の行いを完成させてから無余依涅槃界に入るし、入ってから正法の住するかぎり、菩薩行を行い、仏の行いをも為す、などという。

『弁別釈』(76a6-77a5) には次のようにいう —

「いつか無量光が寂静に逝かれるさまを示してから(※1)、ガンジス河の砂ほどの(76b)二つの劫の間、教えが住するとき、それほど〔の間〕に、撰政〔である〕観自在〔菩薩〕と離れないで、その期間に〔仏の〕正法を受持しますように!

夕べに正法が没した〔とき、その〕暁に、かの聖者観自在〔菩薩〕が現等覚してから、「光普勝吉祥積王」と名づけられるものとなったときには、お顔を見て供養により供養し、正法を聞きますように!

その仏の寿命が九十六のコーティ(千万)・ナユタ(千億)劫に住されるとき、常に侍奉と親近することと、不忘失の陀羅尼により正法を受持しますように!

彼が涅槃してから、かの仏の教えは、六億(77a)三十万のコーティの劫にわたって住する。そのとき、正法を受持しますように!撰政の大勢至〔菩薩〕と常に離れませんように!

次に、その大勢至〔菩薩〕が現等覚して〔仏となって〕、「善住珍宝功德積王」(※2)といわれる如来になるし、寿命と教えは観自在が仏になったものと等しい。かの仏の、常に侍者をして、様々な供養により供養し、正法すべてを受持しますように!と誓願するのです。」

※1) 「さまを示し」というのは、変化身としてその外見を示す。ここでは、示寂する、という意味である。

※2) 名前の冒頭は *rab tu bstan pa* (よく説示した) とあるが、願文自体や『悲華經』より *rab tu brtan pa* に訂正する。

※) 『大樂国土誓願の註疏』 p.298 には、「教・証得の正法を受持・守護・増長しますように!」と註釈している。

(28) 無量寿仏の正法がガンジス河の砂ほどの二劫の間、住した後で没し、その暁には正等覚するよう授記され、この名号が予言されるということは、『悲華經』(Cf.D No.112 Cha 175b7-176a7; 大正 3 No.157 p.186a) に出ている。

(29) 授記において「觀自在」の名の由来は『悲華經』(Cf.D No.112 Cha 176a3-5; 大正 3 No.157 p.186a8-14) に次のように説明されている —

「良家の子よ、なぜなら、あなたは〔諸々の〕悪趣についても見た。上界についても見た。有情すべての苦をも見たし、有情すべてを苦より解放し、煩惱を寂滅させんがために、悲の心を生ずるから、良家の子よ、ゆえにあなたは「觀自在」という。觀自在よ、あなたは数十万コーティ・ナユタの有情を苦より解放することになる。良家の子よ、あなたは菩薩になったとしても、仏陀の行いを為すことになる。」

彼の成仏する国土は、「一切珍宝所成就世界（'Jig rten kyi khams Rin po che thams cad yang dag par bsags pa）」と呼ばれる。

なお、『無量寿經』(Cf.『淨全』 23,p.296-297) において、觀自在と大勢至の両菩薩は「この仏国土」より死去して極樂淨土に生まれたと言われている。ここは釈迦牟尼と阿難尊者の對話なので、「この仏国土」というのは娑婆世界をいうように見えるが、世自在王仏の国土をいう可能性も考えられなくはない。これに関連して、広く經典に三世の諸仏の成道のあり方はすべて釈迦牟尼と同様であると言われていること、そして釈迦牟尼の誓願を説く『悲華經』において阿弥陀仏と両菩薩が過去世において眷属であったと言われていることが、思い起こされる。Cf.梶山雄一「仏陀觀の発展」(『佛教大学総合研究所紀要』 3,1996) p.7

(30) 宗川訳には「明瞭に成仏せられ」とある。「明瞭に」に相当する *mngon par* は、梵語相当語 *abhisambuddha* の接頭辞 *abhi-*の部分である。

(31) 'Od zer kun nas 'phags pa yi dpal brtsegs rgyal po. 漢訳『悲華經』は「遍出一切光明功德山王仏」である。宗川訳は「仏陀聖普光明徳積王」と原義に近い訳語を使用している。Cf.『悲華經』 D No.112 Cha 176a7; 大正 3 No.157 p.186b10

(32) 一部の版本に *zhal ta* (教示) とあり、宗川訳は「奉事」とするが、文脈より採らない。『弁別積』 76b4 に *zhal blta* とあり、『大樂国土誓願の註疏』 p.298 に *zhal la blta* と補足していることより、*zhal blta* を採る。

(33) この仏の寿命については、『悲華經』(Cf.D No.112 Cha 175b7-176a7; 大正 3 No.157 p.186a) に出ている。

※) 『大楽国土誓願の註疏』 p.298 には次のようにいう —

「現在、他者が法を講説するのを妨害しない者には、順縁を成就する。自己もまた、このような『極樂願文』と聖教の言葉一つ以上を知恵に受持したなら、未来に、不忘の陀羅尼を得るのです。」

(34) この仏の入滅とその後の教法の継続については、『悲華經』(Cf.D No.112 Cha 176a7-b1; 大正 3 No.157 p.186a) に出ている。

(35) この大勢至の成仏については、『悲華經』(Cf.D No.112 Cha 177b1ff.; 大正 3 No.157 p.186c) に出ている。

(36) 大勢至の名の由来について、『悲華經』 D No.112 Cha 177b1-3 (大正 3 No.157 p.186c6-12) に次のように説明されている —

「良家の子よ、あなたは大きな住処を希求する。あなたは自己が摂取したとおりの住を得ることになる。良家の子よ、あなたはその仏国土において無上の正等覚を得ることになる。

「甚堅固功德宝積王」という如来(漢訳「善住珍寶山王如来」)になる。良家の子よ、あなたはそのように大きな住を摂取するから、良家の子よ、あなたは「大勢至」というものになりなさい。」

このうち、「大勢至」の梵語 mahāsthāmaprāpta のうち、sthāma (勢力) が sthāna (処) に読み替えられた可能性がある。ただし、直後の D No.112 Cha 177b6-7 (大正 3 No.157 p.186c21-24) の韻文の箇所には、「福德の威力が堅固になったものよ、立ち上がりなさい。十方世間の主が授記された。」などといい、本来の語義が踏まえられている。

(37) Rab tu brtan pa yon tan nor bu brtsegs pa'i rgyal po. 漢訳『悲華經』は「善住珍寶山王如来」である。宗川訳は「如来勝依功德宝積王」であるが、そのうち「依」はチベット語の brtan pa を brten pa に読み誤ったものであろう。

(38) 『弁別釈』(77a5-b4) には次のようにいう —

「〔後生を中心とした誓願の〕 第四: 最後に御心を満了させる仏を得ることを誓願する次に私のその寿命を換えた〔すなわち生まれ変わった〕直後に、その極樂国土または他の諸浄土において、無上の菩提(77b)〔を成満した〕正等覚者の位を得ますように!

正等覚者になってからもまた、善逝無量寿のように、お名前がただ聞こえたほどにより〔世の〕衆生すべてを成熟し済度できること、無数の変化を領かかって〔世の〕衆生を解脱に導くことなどにより、努力なしに自然成就に、無量の衆生利益を為しますように! というのです。

以上、後〔生〕を中心とした誓願が済んでから、第四(以下、省略)」

(39) 名号を聞くことに関しては、『無量寿經』の法蔵比丘の誓願では、チベット語訳第 19, 20 願(魏訳の第 19, 20 願に対応)に、名号して浄信した者を臨終時に来迎し、発願し廻向する

者を極楽へ引導することをいう。第 35 願には、名号を聞いて善を為した者が来世に正覚の心髓（菩提道場）に到るまで陀羅尼を得ることという（対応する魏訳の第 34 願では、無生法忍、深い総持の獲得をいう）。同じく「東方偈」末尾 vv.19-20 において、名号、声、見ることにより多くの者を解脱させよう、という願う者は、速やかに極楽往生すべきであることが説かれている。また、『普賢行願讚』v.60 には、「多くの百千の变化によって、智力により私は十方における多くの衆生の利益をなしますように！」という。Cf.中御門「往生後論攷」（2004）p.37; 『浄全』23,pp.240-242,248-249,292-294

『大楽国土誓願の註疏』pp.299-300 には、この『普賢行願讚』に近い解説をし、段落分けをしている -

「〔世の〕衆生すべての相続を成熟し解脱することが可能な不可思議な功德と智慧と、無数の变化^{へんげ}を分けて十方の〔世の〕衆生を導く（中略）

というそれまでにより、〔極楽往生の〕第四の因〔である〕廻向、および誓願が済んだ。」

(40) 『大楽国土誓願の註疏』pp.300-301 には上記のように段落を分けてから次のように述べている -

「〔次のように〕語った一苦〔である〕輪廻〔という〕この深淵が見えてから、厭離が底から生じた幸いなる者たちは、「浄土へ喜びをもって向き、この誓願について勝者〔・仏世尊〕が証人をなさってください」という。

『光経（'Od mdo）』〔すなわち『無量寿経』〕には、第一の因〔である〕無量光だけをたびたび作意すべきことを説かれたのは、中心〔または正尊〕として語ったものであるので、その国土の器・有情世間両者の功德すべてをそのように作意して、それぞれを得たいと誓願することは『無死鼓音声経』（※）に説かれたので、重要なものである。この本典は、あまりに明瞭なので、在家の男女たちもこれを唱えるとき、散乱しないで〔一心不乱に〕この語義について心を懸けて、〔口での〕言葉および意^{こころ}の願いをもって唱える。極楽に有る幸福・安楽の円満それらも絵画に見ることと、導くとき聴聞することと、極楽願文の言葉より智慧により見るし、意^{こころ}に受持することが、きわめて大きい。たとえ、華一つほどと鳥それらの功德ほどを知ってから、意^{こころ}に憶念するとしても、心の障碍を浄めるし、大きな福德を積むのです。それらは仏陀の誓願と福德より生じたものであるから、仏そのものの福德を憶念するのと等しい。概して地方に幸福な地点が有ることが聞こえたなら、それについて意^{こころ}に誓願する。その経緯をたびたび問う。〔他方、〕極楽の幸福・歓喜・受用の多くの功德を講説することについては、喜びが無い。それについて願うこともしない。その経緯について問うても、知らない人たちはきわめて愚かであり、顛倒に低劣となったものです。現在、「神秘の国に多くの食べ物、飲み物がある」と言う風説を知って、絶望をもってすべてを棄て徒足^{むだあし}をして何も行き場を得ないので、急いで戻ってくることを

望むこと、そして、概して一類の資糧の集積は必要なくて身を棄てないままに国土へ行くことを、〔仏は〕説かれていない。極楽には、行き場の有る無し疑いは必要ない。大きな困難でもって行くことは必要ない。行ってから、再び戻ってくることは必要ない。現在、困難なく資糧を積んだ者においては、努めて誓願を得る。すると、困難なく到ってから究極的な安楽・幸福を経験するのです。」

※) さほど明瞭な記述ではない。

(41) 『弁別積』(77b4-78a4) には次のようにいう —

「第四: 当面の欲する義 (利益、目的) について誓願する

如来の寿命と福德と功德と智慧と威光は無量である。法身無辺光、無量光、無量寿智である世尊よ、誰か (※1) あなたの (78a) お名前を受持する者 (ブドガラ) を、かつての業の異熟を除いて、(※2) 火と水と毒と刀杖と夜叉と羅刹など怖れすべてから救護することは、大牟尼の欺き無きお言葉 (※3) です [。です] から、私はあなたのお名前より (※4) 受持し、尊敬をもって礼拝するので、そのような怖れと輪廻の苦すべてから救護なさるよう御願います。吉祥円満であるように加持してください、というのです。」

※1) 願文自体には関係詞を用いて gang zhig とあるが、ここでは gang zag 'ga' zhig と別の単語に置き換えられている。

※2) 火は火災、水は洪水、刀杖は戦乱を意味する。

※3) いわゆる「真実語」である。下の訳註 4 6 を参照。

※4) 願文自体には mtshan dzin であるが、ここでは mtshan nas dzin となっている。僧伽の中での呼称において時折見られる用例である。

『大楽国土誓願の註疏』 pp.300-301 には、ここから「仏の名号を受持したことの利徳を説明するのを通じて結論する」という科文になっている。さらに、願文の言葉に仏道の体系を読み込んで解説している (下線部は願文の本文である) —

「第二、仏の名号を受持したことの加持が今生より生起するよう祈願することは、如来〔である〕無量光の寿命の無量の功德を前述のようにと、多くの無数の劫において海のような (※1) 福德と智慧の二資糧を積んだことにより、因の集積二つの功德が無量であるのと、果〔である〕十力と四無畏 (※2) などの〔障の〕断除・〔智の〕証得の海のような功德と、五つの智慧 (※3) など、智慧・慈愛の効能の無量の功德と、身体が見えるなら順じないことが無いこと、大いなる福德の吉祥により圧倒されないので威光は無量であるなど、色身の功德である。四身と五身 (※4) が自然成就した無量の功德について、〔專注した〕一境性の淨信により随念して名号を受持することが必要です。名号はどのように申し上げてもいい。」

※1) 修行の広大さを海に譬えて、それを福德と智慧の二資糧と理解することは、『普賢

行願讃』 vv.39-40 とその註釈文献において見られる。Cf.中御門敬教「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究（6）」（2012） pp.7-8,30-31; なお、これらの項目は、『無量寿経』『阿弥陀経』などの直接的な主題となっていないためか、直接的には言及されていない。

- ※2) 力、無畏の声（ことば）は、極楽において池の水から三宝や三解脱門の声などとともに聞こえるとされている。Cf.『浄全』 23,pp.278-279
- ※3) 唯識瑜伽行派で説かれる、如鏡智（大円鏡智）・平等性智・妙觀察智・成所作智の四智に、法界智（法界体性智）を加えたものであり、密教典籍に説かれている。Cf. 頼富本宏『密教仏の研究』（1990） p.215ff.
- ※4) アティシャ著『般若波羅蜜撰義灯論』（Cf.P No.5873 Nyo 474a1-4; 和訳 望月海慧『チベット仏教におけるラムリム思想の基盤に関する研究〔改定増補版〕』（2005） p.111）には、自と他の利益により「三身」とマイトレーヤは説かれたこと、『現觀莊嚴論』 VIII に関して、自性身・智法身・受用身・変化身の四身とハリバドラは説かれたこと、変化による変化などが有るので、五身と他の者たちが言うことなどが、挙げられている。五身説に関しては、『*Bod rgya nan don rig pa'i tshig mdzod*（藏漢佛学詞典）』（Si khron mi rigs dpe skrun khang,1985） p.78 に、1）法身・受用身・化身・自性身・智慧法身、2）ニンマの二十五果の区別のもととなった身・語・意・徳・事業、3）ニンマのタントラに出る二十五果法の分類の、法身・受用身・化身・不変金剛身・現等覺身、という三説が挙げられている。Cf.ツルティム、藤仲『解脱の宝飾』（2007） p.376
- (42) 「無辺光」「無量光」という二つは代表的な名号であり、『無量寿経』の十九の名号（魏訳の十二光仏）にも含まれる。ただし「法身」という規定は、ニンマ派での無辺光、觀自在、パドマサンバヴァの三身説を承けているようである。詳しくは『佛教大学総合研究所紀要』 20（2013）に発表予定の中御門論文訳註 2 2を参照。
- (43) 『無量寿宗要経』での名号である。チベットでは、この名号の仏は密教の成就法での伝統を承けており、その仏像は菩薩形を取るが、基本的に阿弥陀仏と同一視されている。先行する類似した名号としては『無量寿経』には「智慧光仏」というものもある。
- (44) 『大楽国土誓願の註疏』 p.302 に、「大牟尼の欺きの無いお言葉〔である〕『無死鼓音声』などに説かれましたので、それに信認を生ずる。」という。『鼓音声陀羅尼経』（Cf.D No.676 Ba 222a5-7; 大正 12 No.370 p.353a23-26）の終わり近くに、「かつての業の異熟を除いて」という例外規定を含めてこのような記述がある。Cf.和訳 中御門敬教「阿弥陀鼓音声陀羅尼経の研究」（2006） p.46
- (45) 『大楽国土誓願の註疏』 pp.302ff.には、インド後期からチベットの仏教で、上師に三宝すべ

てを代表させる風潮とは反対に、阿弥陀仏に代表させている。あるいは、阿弥陀仏こそを直接的な上師と考えているというべきか。その上で三門の礼拝を読み込んでいる -

「私は、主〔である〕あなたの身について根本師など帰依処すべてが収まっていると思って、(※1) 浄信によりお名前を意に受持し、語により唱え、身により礼拝してから、「当座の恐れすべてより救護なさるよう御願ひします」と心から祈願することと、前に廻向の支分の個所に説明した当座の利益と、ここに説明された寿命の障碍を除去するなど、要するに今生と後生の境位すべてにおいて身・語・意の三〔業〕と混ぜたし、法の逆縁すべてが鎮まり、順縁が意のままに成就することと、いつか極楽に生まれてから仏を得るなど、今と後すべてにおいて、吉祥の善き兆しの円満であるものが来るよう加持してください、と思って誓願することが必要です。

そのように仏の功德を憶念してから信を生ずることは、利徳が大きい。『〔ウダーナ〕篇』(※2)に「毎月、千の供施を百年に配ることは、仏を信ずることの福德の十六分に至らない。」という。現在、五濁の時代においては外・内の恐れがきわめて多い—これについて、威力の大きな世間の神々に対して祈願するなど他の何によっても救護することは難しいことであるので、正等覚者〔である〕無量光〔仏、という〕帰依処すべてが収まったこれに対して祈願するより優れたことは何もない。

(※3) 今、特に野蛮人の教えが栄えてきたとき、多くの悪しき物品と悪真言の侵害が生ずるのである〔だ〕から、それもまた「無量光に対して祈願したなら、全く及ばない」と賢れたご上人の多くの口伝があるので、忘れないですべての者が意に受持してください。

『日藏経』(※4)に「仏に帰依する有情を、コーティの魔たちは殺害できない。戒が損なわれたし、知が錯乱しても、彼は必ず生の彼岸に行く。」と説かれている。(中略)(※5)

名号を受持して祈願したことにより、当座のそのような利徳〔があるの〕と、最後に〔極楽〕国土に生まれる。『経』(※6)に、「これより西の彼方に極楽世界〔がある〕。そこに正等覚者がおられる。如来〔である〕無量寿〔である〕。誰かその名号を唱える者は、そこに生まれることになる。」という。よって、「世尊、如来などより供養し、帰依します。」といい、「無量光仏などよ、〔極楽に〕生まれるよう加持してください。」と回数をお勧めすることが重要です。」

※1) ci mdzad khyed shes kyi とあるが、解説できない。

※2) XXIV21; 和訳 中村元『真理のことば・感興のことば』(1978) p.235

※3) 著者ラクラ・ソナムチュードゥブ (1862-1944) の生きた 19 世紀後半から 20 世紀前半の、欧米の帝国主義や物質主義の拡大への言及であろうと思われる。

※4) 未確認。

※5) 以下、信の功德、仏による救護が詳説されているが、長いので割愛した。続きは『大

楽国土誓願の註疏』 p.309 の終わりの部分である。

※6) 『阿弥陀経』の正宗分の冒頭の極楽依正と、念仏往生という二つの要所の取意かと思われる。ただし、後者の経文は、名号を聞いて無散乱の心により作意することにより来迎があるというものであり、称名への言及はない。Cf. 『浄全』 23,p.342,348

(46) 『弁別積』(78a4-b3)には次のようにいうー

「第五: 誓願が完了するついでに終わりの為すべきことは、

仏の法身と受用身と変化身すなわち三身もまた、勝義を証得した側からは平等である。または、三身の位を現に獲得した者の加持と、変わらない法性〔すなわち〕(78b)「前のように後でそのとおりに〔である〕、変わることはない法性。」というような諦の加持と、僧伽たちの心相続の証得の功德〔すなわち〕誰も分裂させられない和合したものの加持の威力でもって、上に誓願を立てたとおり、妨げなく成就しますように！」

『大楽国土誓願の註疏』 p.310 には、「第三、誓願の成就に順ずることになる真実語、総持、真言により加持すること」という科文を立てて、次のような概略を示しているー

「一般的に、誓願が成就することは、因の広大な集積があるなら、成就することは上に説明した。〔菩薩の大〕地を獲得した聖者たちがおよそ立てた誓願すべては成就したのです。戒の清浄な人(ブドガラ)と殊勝な田(※)に依ったのと清浄な増上意樂(勝れた思惟)により誓願を立てたとしても、成就しやすいことを、説かれています。そのような自力が無いのなら、他力〔である〕三宝の威徳と能力に依って、諦(真実)を表記したなら、三宝が欺くことはありえないので、自己の誓願を立てたことに適合するようなさり、成就することが決定しているのです。」

※) zing は国土とも翻訳できるが、ツォンカパ著『道次第大論』の十善十悪の業道を論ずる個所に「有力な業の門」を挙げ、そこに父母や三宝や師長を有力な田とし、諸経典を引用しているのを参照して、「田」と翻訳した。もっとも極楽浄土とそこでの三宝を有力な田と考えるなら、「国土」であっても構わない。Cf. ツルティム、藤仲『菩提道次第大論の研究』(2005) p.224ff.

(47) 『大楽国土誓願の註疏』 pp.310-311 には、次のようにいうー

「法宝もまた、法性〔である〕真如〔すなわち〕いつも変わらない諦の加持を自性としたものである。『宝性論』(※)に「前と同じく変わることが無い法性」という加持と」

※) 中村瑞隆『蔵和对訳 究竟一乘宝性論研究』(1967) pp.101-102、高崎直道『インド古典叢書 宝性論』(1989) p.89

若原雄昭「大乘仏教に於ける真実語 (satyavacana)」(『仏教学研究』 56,2002)には、この用例としてジャータカ文献やアヴァダーナ文献、『三昧王経』のほか、『無量寿経』の「四誓偈」の末尾の個所で、法蔵比丘が世自在王仏を証人として、自らのこの誓願が真実であって成就

するのであれば、三千大千世界が震動し、神々が華を降らせよ、と述べて、そのめでたいしるしが現れて、誓願自体も実現されることになった、という記述を、挙げている。なお、より古い例としては、聖者となった後のアングリマーラが行乞のとき、難産の女に対して諦語を述べて安産させたという事例も挙げられるであろう。Cf.平川彰『初期大乘仏教の研究』（1989）p.344; 日本における「起請文」もこの諦語の一種と言えるであろう。

(48) 『大楽国土誓願の註疏』 p.311 に、次のようにいう —

「諦の証人を述べるこの意味は、上の〔諸々の〕誓願の個所においても憶念を得たならよい。自己が諦（真実）力を述べたのと、勝者およびその子（菩薩）たちも〔その三業のうち〕語金剛により「それがそのとおりに成就しなさい。」と仰ったとってから、心喜ぶべきです。そのようなら、誓願が成就することに疑う必要はない。」

(49) *tadya thā / panytsa nidra ya a wa bo dha ni swā hā* とあるが、表記に問題がある。『大楽国土誓願の註疏』 p.311 には、「すなわち、五根が清浄な基礎を建てた、という誓願が成就する転変（または翻訳）の真言です」というのを考えて、表記を訂正しておいた。

(50) 『弁別積』（78b3-79b5）には次のようにいう —

「*tadya thā / panytsa priya a wa bo dha ni swā hā* /」というのは、誓願が立てたとおりに成就する陀羅尼です。

「三宝に帰命します。「*na mo manydzu shri ye / na mo uttama shri ye / na maḥ su shri ye / na ma utta ma shri ye swā hā* /」というのは、礼拝されるべきものの陀羅尼です。それらを実践において唱えるとき、そのように国土の莊嚴を中心に示してから誓願することもまた、言葉のために御心が赴くので、一緒に仰ることをお願いします。(79a) 礼拝をもって、「コーティの仏などを述べる」ということで例示して、適用することを知るべきです。

それもまた、極楽の国土に生まれる因の中心は、形相をたびたび作意することなので、まさにそれこそを多くの年月に修習するなら、およそ止住を数習したことにより、現前に視野に浮かんでくるきわめて近似したものが、必要です。そうでなくて、唱えることが多いのと講説ほどを知っていることによっても、生まれることを知らないもので、それがきわめて重要です。

発菩提心が無いなら、声聞として生まれたので、仏の位を得ることについては遅くなる。チャクメーのこの『極楽願文』とパンチェンが造られた「欺き無き〔三〕宝」〔といて始まる極楽願文〕(※1)、尊者〔ツォンカパ〕の「究竟したもの」〔といて始まる極楽願文〕(※2)、一切智者ジクメー・リンパが造られた「塵を離れた」〔といて始まる極楽願文〕(※3)などもまた、諦を(79b) 見てから〔菩薩地の〕大地に住しておられる者の加持あるお言葉ですから、私のようなものにおいて党派、学説のようなものの必要性は無いので、唱えることがきわめて重要です。

他に何も知らなくても、極楽国土を作意することと、すべてにおいて善良な思惟をなして帰命するように、「無量光仏に帰命します。極楽に生まれるよう加持してください。」ということを毎日途絶えずに(※4)述べるし、上に説明したように主無量光のお名前が聞こえても、尊敬をもって合掌することについて学ぶとしても、大きな利益が見られるのです。」

※1) Paṅ chen Blo bzang Chos kyi rgyal mtshan (1567-1662. 数え方によりパンチェン 4 世ともパンチェン 1 世ともいう) は、タシルンボさらにセラ、デブンといったゲルク派の大寺に住持し、ダライラマ 4 世、5 世が具足戒を受けるとき親教師をも務めた。ダライラマ 5 世によるチベット統一政権の時代に大きな影響を与えた。彼は没後、阿弥陀仏の活仏として認定されたが、これはゲルク派ではダライラマ 2 世以降二人目であり、彼から遡ってパンチェン・ラマの系譜が成立することになった。この極楽願文は、『世尊無量光に依る遷移の略法 (*bCom ldan 'das 'Od dpag med la brten pa'i 'pho ba bsdus pa*)』に含まれたものである。詳しくは、佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』(2011) pp.68-69 を参照。

※2) Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357-1419) は、チベット・モンゴルの最大宗派ゲルク派の開祖である。この極楽願文は極楽願文『最上国開門』の読誦版である。完本冒頭の 1 偈頌とその直後の 1 文と末尾の極楽誓願を抜粋したものである。詳しくは、佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』(2011) pp.91-92,99-100 を参照。

※3) 'Jigs med gling pa (1729/1730-1798) は、ニンマ派教義の大成者ロンチェンパ (1308-1363) を幻視して教えと儀軌を授かり、そのニンティックの体系を継承した。古刹ミンドゥルリン所蔵の『古派タントラ集』を整理し、ニンマの復興を目指した。弟子にジクメー・ティンレー・ウセル ('Jigs med 'phrin las 'od zer 1745-1821, rDo grub chen1 世) やクンサン・シャンペン (Kun bzang gzhan phan) がいる。この系統では、ジュ・ミパム (1846-1912)、ジクメー・テンペーニマ (1865-1926, rDo grub chen3 世) などリメー(無宗派運動)で活躍した人が多く、彼らは阿弥陀仏や極楽往生に関する著作を幾つも著わしている。ジクメーリンパも、『大界の精髓の滴 (*Klong chen snying gi thig le*)』という文献群に収録された願文『極楽国土の莊嚴・誓願 (*bDe ba can gyi zhing bkod smon lam*)』(これも『無量寿経』の所説に基づくもの) や、極楽往生に関する儀軌を著している。この極楽願文は、『極楽に往く儀軌—無量速疾道—というもの (*bDe ba can du bsgrad pa'i cho ga dpag med myur lam zhes bya ba*)』と併用されるものようである。詳しくは、佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』(2011) p.89、梶浜亮俊『チベットの浄土思想の研究』(2002) を参照。

※4) ma chags par とあるが、文脈より ma chag par と読んだ。

また、『大楽国土誓願の註疏』p.312 には、さらに幾つかの極楽願文を追加している。すなわち — 「この実践は、願樂を〔專注させて〕一境性により言葉を念ずる憶念の門より、「私と私〔に關係する者すべてが〕など(※1)よりここまで三回唱えてから、次にナーガールジュナの「ここより西方に」〔で始まる極楽願文〕(※2)、パンチェン・ロサン・チョーギェンの「欺きの無い」〔で始まる極楽願文〕、尊者上師 (rJe bla ma) の「いつか寿命の諸行」〔で始まる極楽願文〕(※3) など、私、ラブジャムパ (Rab 'byams pa) の「娑婆」〔で始まる極楽願文〕(※4)、一切智者ジクメーリンパの「塵を離れた」〔で始まる極楽願文〕などをも唱えたなら、〔菩薩地の大地〕地を得た者たちの語加持を持ったものであるのです。重要で、読誦分の上では、学説があるのは拵げないし、控えるべき罪惡に他ならず、法ではない。

次に『普賢行願讚』などを唱えるべきです。そのように〔極楽往生の第一因として、〕依処〔である〕資糧田を明瞭にするのは無量光と国土の莊嚴をたびたび作意すべきであるし、〔極楽往生の第二因として、〕因〔である〕資糧の集積、障碍の治浄をできるだけすることと、〔極楽往生の第三因として、〕助け〔である〕發菩提心、他者を益する善い思いについて修心することと、縁〔である〕清浄な誓願について、強力な願樂を向けてたびたび祈り、極楽に生まれる第四因〔である廻向として〕、在家の男女に対しても、要約したもののほどを解説し、決定すべきです。」(以下、省略)(※5)

※1) この極楽願文の、「極楽往生の第四の因 — 善根を自他が極楽に生まれる因として廻向する」の冒頭である。

※2) 『大楽誓願 (*bDe ba chen po'i smon lam*)』(Cf. bKra shis 編、*bDe smon phyogs bsgrigs, stod cha, Si khron mi rigs dpe skrun khang* (四川民族出版社、1994) pp.151-155) のことである。この願文には唯識以降の理論や密教の用語も見られるので、歴史上の龍樹その人の著作ではない。佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』(2011) p.99 を参照。

※3) ツォンカパの上記の願文のうち、祈願の部分である。bKra shis 編、*bDe smon phyogs bsgrigs, stod cha* (1994) p.187ff.

※4) 未確認。kho bo (私) が人名の前に置かれているが、「私の願文」ということであれば、なぜこの列挙の最後でなく、ジクメーリンパの前に出てくるのか、よく分からない。むしろ、固有名詞と取るべきかもしれない。

※5) 以下、五濁の現代にあつて、ほとんどの者が悪趣に転落するが、この行法は行いやすい近道であり、実践できない者もない。特にチャクメーのこの勝れた教えを通じて、ペル・ゲ・リンポチェ (dPal dge rin po che) の『国土成就の実践 (*Zhing sgrub kyi phyag bzhes*)』は現代の法の取り分として設立されており、不可思議なほどの有情が

それにより極楽往生できること、それが実現しないなら、仏の言葉が欺いたし、私たち自身が欺いたことになるので、世も末の者はこの教えに努めるべきことを説き、『無量寿経』(Cf.『浄全』23, p.320)の「福德を造っていないなら、このようなこれら〔経典〕が聞こえることにならない。成就した勇者彼らはこの教えが聞こえることになる。」という教証を示している。この教証は、魏訳の流通分のうち「諸仏経道、難得難聞」に該当する。

ともあれ、同じニンマの法統に属するジクメーリンパだけでなく、ツォンカパやパンチェン1世といったゲルク派の大祖師の名も挙げられていて、リマー(無宗派運動)の特徴を示している。また、それらの極楽願文が宗派を越えて普及していたことも推測できる。

(51) 『大楽国土誓願の註疏』p.311にチベット語訳されている。和訳すると、「マンジュシュリー(妙吉祥)に帰命します。善なる吉祥に帰命します。最上の吉祥に帰命します。いやさか!」となる。

(52) 以下、願文自体より小さな文字で記された附記である。念仏の行者を三種類に分類する例としては、『無量寿経』の「三輩段」の個所がある。そこは大乗の聞法や信に關係して詳しい所説である。そういう機根の人たちの実践という意味で、ここでの礼拝の回数と結びつけてもよいであろう。なお、チベットで有名な「菩提道次第」も三土の実践の階梯であり、典拠は『俱舍論自註釈』(Cf.ad III91; 山口益・舟橋一哉『俱舍論の原典解明 世間品』(1955) pp.468-472)に基づくとき、自己のために後の世間的な利益を求める者、自己のために世間の利益を求める者、他者のために両方を求める者と分類されている。

また、「七回以上、礼拝」、あるいは「前夜に恭敬し」などという記述については、『阿弥陀経』に念仏往生の修因の個所に、阿弥陀仏の名号を聞いて一夜乃至七夜、一心不乱に作意すれば、臨終のとき来迎があるという。Cf.『浄全』23, pp.286-291, p.348-349

以下、『弁別釈』に直接的に対応する個所は無い。『弁別釈』(79b5-80a5。ただし『弁別釈』にはまだ小さな文字ではない)には、「流通分」として廻向、誓願すべきことが説かれている。

すなわち —

「終わりに『清浄大楽国土の誓願』に関して、法を説明、聴聞したことの善根それに依って、一切有情が究竟の一切相智(80a)を成満した仏の位を得ること、世界に適時に雨が降ること、耕作・牧畜が常に善いこと、外・内の動揺・争乱が静まること、特に仏の教えの宝が栄えて広まり、永らく住して、党派を離れた持教者〔である〕上人がたの寿命が安泰であり、講説・修行の両輪でもって時を過ごすために、廻向・誓願を浄らかにするように!と〔いうことを〕結びつけてから、廻向・誓願すべきです。」

(53) 『弁別釈』(80a5-81b1)には結語と廻向文として、次のようにいう —

「〔終わりに〕述べよう — たびたび輪廻の苦によりよく厭ってから、大楽解脱の好適で喜

ばしい房舎の頂きにおいて疲労を癒したい者たちが、この階梯に入ったのと、遠からず安楽の休息を獲得し、それにより、学者と行者の自在の(80b) 因の諸資糧〔が円満であるの〕と、ここ〔現世〕での現れが安楽だご覧になって、「五つの糧食」(※1) といって大いに糧食の円満を具足した〔裕福な〕長者の童子にとっては、乞食の食べ物のようなこの〔貧しい〕善積により、何が可能なのか。〔何も可能ではない。しかし、〕稀有〔である〕聞・思する〔聖〕財について困窮している、実践の(※2) 友を欠いている、貧しくて低劣な私のようなものが〔他にも〕ありうるのなら、〔彼らにとっては〕意見の処としてこれこそが、必要不可欠なようなもの。けれども、三種類の懈怠の(※3) ^{ものおしみ}慳により繫縛された、老死の飢渴の感受により苦悶しやすいが、行ずることができない者は、典籍の器として残っている。無益の荷物により疲労するだけでなく、これにより厭う。そうであっても、自己の報恩と、或る勝れた友が勧めたのに忍びがたく、悪しき動機の毒により汚さないで、増上意樂(勝れた思惟)の善き杖に依って、〔この『弁別積』を〕書いた。

〔廻向一〕(81a) この善を始めとして、三世の善の集まりすべて、仏子をともなった三世の勝者に従うことにより、〔恩ある〕老母〔である〕有情(※4)の利益のために廻向します。すべての者もまた〔仏の〕四身(※5)の自体を速やかに得ますように！それを得ていなくては〔その間は〕(※6)、大楽国土において千の光相が輝く仏およびその子〔である菩薩〕の相好の妙顔が眼の甘露になって、甚深・広大の法の雨により善くなる(※7)ように！虚空の辺際に至る有情界が尽きなくては〔その間は涅槃に入らず、〕私は住するし、有情の利益のためにまた、劫は無間地獄に住することから知ることが必要であり(※8)、最上の牟尼王に従おう！そのように〔障の〕断除・〔智の〕証得が究竟した仏と、寂静・離貪の正法の宝、三学の法蔵を(81b)受持する僧伽〔という〕最上の三帰依処が、諦(眞実)により成就しますように！」

※1) rgyags lnga 未詳。

※2) nyams len no (na?) bi ka yi とある。解説できていない。

※3) ガンポパ著『解脱莊嚴』の第十五章「精進波羅蜜」、あるいはタルマリンチェン『入菩薩行論の釈論・仏子渡岸』「精進波羅蜜」において三種類の懈怠を挙げている。法統からして関係があると思われる前者では、〔楽にこだわる〕懶惰の懈怠、退廢の懈怠、譴責の懈怠という。ただし「懈怠の慳」の内容については不明である。法施などを怠る師拳などを意味するのであろうか。Cf. ツルティム、藤仲『解脱の宝飾』(2007) p.344

※4) アティシャの教えた發菩提心のための七つの因果のうち、まず初めに有情を恩ある母と見るという項目がある。Cf. ツルティム、藤仲『悟りへの階梯』(2005) pp.162-164

※5) 『現觀莊嚴論』VIII におけるハリバドラの解釈である。訳註4 1を参照。

※6) *de ma thob bar* とある。自らが成仏したときには、自らの誓願を成就し、教化対象者を成熟させ、国土を浄化しているが、それを達成するまでは、といった含意である。

※7) *sims par shog* と形容詞が単独で用いられていることには違和感がある。発音の類似した *tshim par shog* (満足するように!) の誤表記の可能性が考えられる。現に、『無量寿経』には、「十二光仏」の個所(チベット訳では十九の光の項目になっている)にも *tshim par 'gyur ba'i 'od* (満足するであろう光。魏訳「勇躍光」)という表現、または、極楽において粗大な食物を食べないという記述にも、*lus tshim par 'gyur* (身が満足することになる)という表現が、見られる。Cf. 『浄全』23,p.264,p.280

※8) 『普賢行願讃』v.45 に、誓願が虚空を尽くすものであれ、ということが出ているし、v.58 に、世間のあるかぎり、ということが出ている。しかも、後者は極楽往生して菩薩の行「普賢行」を行うことに関する偈頌である。

(54) チャクメー著『山法・独居修行の教誡』第42章「国土の選択・財宝を受けとる船主」では、これらの典拠に加えて『現在仏立三昧経』を挙げている。Cf. 藤仲孝司(2006) p.76

(55) この願文への奥書は、佛教大学総合研究所編『浄土教典籍目録』(2011) pp.114-115 に訳出した。以下、『弁別釈』(81b1-82a6) も小さな文字で奥書がある。同『浄土教典籍目録』(2011) p.116 に訳出した。

FUJINAKA TAKASHI

Research Fellow,

Gangs ljong Nang rig mthun tshogs (チベット仏教文化協会)

NAKAMIKADO KEIKYO

Research Fellow,

Research Institute for Jodoshu Buddhism, Chion-in (知恩院浄土宗学研究所)